

昭和十年一月一日發行 每月一圓二角五分

目 次

聖訓摘要	日
日蓮教學講座(第十六回)	河
實在の根本原理	中
法華經講話(第十三講)	小
記事	林
○各地教信	一
○寄附團費誌料領收	郎
○賀詞交換	明
	人

第十四年一月號

統

一

法財

人團

統

一

團

發

行

財團統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定業ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ執行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ每ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ調達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラシム事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方テ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方テ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方テ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

聖訓摘要

三 澤 鈔 (承前)

日生上人

さうしてこの法門は釋尊から以降今日に至るまでのえらい人が、心の中には持つて居つても口に出して言はなかつた事である。然るに日蓮が之れを言ひ出したのは不思議な事であるが、これが現はれた以上は他の教は恰かも日出で、後の星の光のやうなものである、今迄に在るいろ／＼の宗旨の教は、悉くこの開目鈔に現はす教義に依つて打破られてしまふものである。さうして必ずやこの教は日本乃至一國浮提に弘まる、その弘まる時に日蓮の門下は皆その名譽を揚げる譯であるといふ事を此處にお書きになつて居る、「各々はかゝる法門にちぎり有る人なれば頼母しと思召すべし」と仰せられて居るのである。それを法華の信者自らこの法門を忘れてしまつて、法門にちぎり有る所ではない、法門に反對して閻魔法王の前に引出されるやうなことになるつて居る、お題目さへ唱へて居れば地獄に行かぬといふやうなことを言ふのは、間違ひ切つたことである、お題目を幾ら唱へても了簡が本佛釋尊に背いて居つたならば

「忠義ぢや〜」と言つて天子様に及向ふやうなものぢや、「孝經を持つて父母の頭を打つが如し」と日蓮聖人も言つて居る、口に法華經を讀むと雖も、心に於て本佛釋尊を忘れた時に於ては、親孝行の事の書いてある本を讀みながら、片方で親の頭を打つやうなものぢやと言はれる、その通りぢやないか。帝釋様や鬼子母神の前に行つて、南無妙法蓮華經ナンと言つて居るのは、帝釋様や鬼子母神様が助けて呉れると思つてお釋迦様の事を忘れて居る、それではいかぬ。この法華經は統一神教の理想であるから帝釋様が働いても鬼子母神が働いても、皆釋尊の命令の下に働くといふ事を信じなければいかん、逡巡が働いても憲兵が働いても、それは皆我が天皇の大権の下から出て働いて居るものであるから、この逡巡に禮をいふとか憲兵に禮をいふ本は天子様ぢやといふことに、ズツと精神を戻すのが日本の國民道徳である。どの佛様、どの神様から有難味を受けても、本佛釋尊の大慈悲に戻すといふ所謂推功歸本するといふ事を教へたのが日蓮主義である、その位の事が了解せられないでどうするか。それが判らぬ位ならば國體の道徳が判かるまい。天皇の有難い事は判つて居るまい、これは同じ思想の系統であるから法華宗で居て本佛釋尊が了解出来ないで、鬼子母神や帝釋に流れて行くといふ者は、國體の上でも交番の逡巡が有難くなつて、天子様の有難味が判かるまい、そんなことを「難かしい〜」と言つて許すことは出来ない。であるからモウ少し人心を啓發しなければならぬ。宗教といふものは詰らぬ事にひつついて「判らぬ〜」と言へば皆判らなくなつてしまふ、少しは判かるやうに思想を啓發して行くのが宗

教の任務である。

その次に内房の女房の事が出て居ります、それは或る婦人が「お宮に參つた序でに伺ひました」と言つて日蓮聖人を尋ねて來たので、日蓮聖人が「それはいかぬ、本佛釋迦牟尼佛に參詣するのに、お宮詣の序でだといふやうな事はいかぬ」と言つて面會せられなかつた。

又身延の近くに下部といふ温泉があつて、その温泉に遊びに來て居る人が「湯の序でに來ましたと言つて來る者があるが、是等も面會を謝絶して、一切自分は會はなかつた」といふ事が書いてある、これも大事な點である。日蓮聖人は本佛釋尊を以つて信仰の中心に置くといふ事を始終お考へになつて居るから、今申した一大事の事と言つても、開目鈔にある所の主師親の三徳から本佛釋尊を戴いて居るのである。それが日蓮主義である。そこで内房女房の事も、お婆アさんが態々會ひに來られたので會はぬのは氣の毒だけれども、序でに來たといふやうな事はそれはいかんと言つて、實に日蓮聖人は嚴肅に言うて居られる、これも名高い文章である。

又内房の御事は御年老らせ給ひて御渡りありし、痛わしく思ひ參らせ候ひしかども、氏神へ參りてある序でと候ひしかば、見參に入るならば定めて罪深かるべし。其故は神は所従なり、法華經は主君なり、所従のついでに主君への見參は世間にも恐れ候。其上尼の御身になり給ひては先づ佛を先とすべし、かたがたの御失ありしかば見參せず候。此の又尼御前一人には限らず、其の外の人も

下部の温泉のついでと申す者を數多追ひ返へして候(編輯遺文録 一七〇六)

日蓮主義は日本の神様を大切に主義だけれども、宇宙絶対の本佛、三世十方の本佛としては釋尊を認めなければならぬ。日本の神様は日本の國をお開きになつた建國の祖としての神である、それで宜いのである。日本の神様を宗教の宇宙的の神様に持つて行かうとすると間違ひが出来て来る。家の親父がえらいからと言つて、それが即ち町長ちや市長ちやと考へたら間違ひである。親父は親父でよい町長ではない、日本の神様は日本の國の神様である、それを宗教の神様に持つて行かうとすると大變な間違ひが出来る、だから基督教のやうに日本の神様を侮辱するやうな者が若しあつたらそれは間違つて居る。又神道をついで宗教の着色を加へて、神道の神で一切宗教の要求を満たさんとする者は皆暗愚な人達である。さういふ事は日本の文化に於ては許されない事である、それは文明が退歩をしたからそんなものが出て来るのである。日本の神様は國の神様としてちやんと極つて居るものである。それは最初聖德太子の時分にその問題が起つて、さうしてちやんと解決がついて朝廷から佛敎を日本にお弘めになつたものである、後の頑迷な神道者流がいふやうな事なれば、聖德太子はじめ朝廷に於て佛敎をお弘めになる譯がない、そんな事は彼等の一家言である。日本はちやんと神佛の三敎が融合して進んで来たのである。第一聖德太子の憲法がさうちや、國體を重んじ、三寶を敬ひ、又儒敎で謂ふ仁義禮智みな融合して十七憲法が出来た。さうしてそれが千數百年間日本の文化を支配したものである、それに反對するやうなものは一家言に過ぎない。これは御一新の時分にやり損つたのである、漸くこの頃になつて「聖德太子に濟まなかつた」というて昨年その御説の爲に六十萬圓が使つて御法事をしたのだがそれも大きな聲では言へない、罪深きが故に大懺悔といふことが出来ないものである、本當のえらい者ならばやるけれども、所謂小人非を飾るといふもので、「懺悔の爲にした譯でもないのか」「イヤ、さうではない譯でもない」といふやうな事で、何だか判らない。これは明治維新の當時に、佛敎を斯の如き有様に置いたといふ事が確かに大失態であつた、勿論佛敎の改革、改善は宜しい、今日は弊害も澤山あるから、悪い弊害を矯すのは宜いけれども、弊の末を以つて佛敎を捨て、しまふといふ事は非常な間違ひである、そこは今日大いに反省しなければならぬと思ふ。

上野殿御返事

或は火の如く信する人もあり、或は水の如く信する人もあり。聽聞する時は燃立つばかり思へども、遠ざかりぬれば捨つる心あり。水の如くと申すは何時も退せず信するなり、此はいかなる時も常に退せずとわせ給へば、水の如く信させ給へる歎、尊とし尊とし。實やらん家の内に災厄の候なるは、よも鬼神の所爲には候はじ、十羅刹女の信心の分際を御心み候らむ。實の鬼神ならば法華經の行者を惱まして頭を破らんと思ふ鬼神の候べき歎、又釋迦佛法華經の御處事の候べきかと、ふか

これは能く知れ渡つて居る御教訓で、信心をするのに、火のやうに熱心に一時燃え立つても、程なく消へてしまふやうな信仰はよくない、水の滾々と流れて盡きざるが如くに、永い年月を経てもその信心が退轉をしないやうに、終り迄信仰を貫き通すといふ事が最も大事な事である。所があなたは永く信心を續けて、今日に至つてもいろ／＼御供養をなさるし、又法門の事をお尋になる上から考へれば、水の如き信者で、歳月を経るに従つて愈々信仰色優つて来た次第であると言つて、上野殿を褒められた譯であります。所があなたの御手紙に、家の内に災厄がある、何か病人が出来たとか災難があるといふことが書いてあるが、それはどういふものであらうか、あなたが左様に信心をするのに災難が起るのは、悪鬼惡魔の方から来た災難ではないと思ふといふ事をお書きになつて居る。何故かといへば法華經の行者は十羅刹女がお守りになる誓ひがあつて、若も法華の行者を惱ます者があれば、その者の頭を七分に破るとまで仰しやつて居るからして、惡鬼羅刹があつて法華經の行者を惱まして居るとすれば、その惡鬼羅刹は鬼子母神様に捕つて、頭を打ち破られる譯であるから、わざ／＼頭を破られに來る惡鬼羅刹はなからうぢやないかといふ事が書いてある、非常に面白い意味であります。「實の鬼神ならば法華經の行爲を惱まして頭を破らんと思ふ鬼神の候ふべきか」——頭を破られても構はぬといふ決心をして出て來るやうな鬼神は居るまい、それであるからあなたの家内の災難は、惡鬼羅刹から來たのではなくして、寧ろ

法華經の守護神がその信仰を試みる爲めに起つた事と思ふ。又法華經の行者は釋迦牟尼佛がお守り下されることは洵に明白な事であるから、佛がお守り下さつて居るのに、小さな惡鬼羅刹などが災厄をすることは出來るものではない。この意味から考へるとお互ひ信者などの間に起る災難は、大體信心を試みられるものと思つて、其處に一段の信仰を勵んで行かなければならぬことと思ふのであります。ちよつとした災難が來ても、「これは大變だ」と狼狽へるやうなことではいけない、大體佛敎信者の心得の大切な點がそこにあるやうに思ふのであります、いろ／＼の事に出會す爲めに狼狽へたり歎いたりするのではなくして、その普通人が見て災難といふものを、寧ろ自分の信仰の肥料にしてその災難を捉へて益々自分の修養の資料にして行くといふことでなければならぬ。例へば武者修業に廻つて居る者が途中で追劔に出會つたといふやうな事は災難ではない、「昨夕は面白かつた、寂しい所をブラ／＼歩いて居つた所が、追劔が出て來て斬合をやつたが、大分強い奴で手答へがあつて面白かつた、けれどもトウ／＼其奴を斬捨て、しまつた」といふやうな工合になるのである、それが此方が弱いといふと慄へ上つてしまつて、トウ／＼素ッ裸にされるといふやうな譯である。佛敎信者といふ者は、普通人が見て災難と言つて居るやうな事に怖氣があつてはいけない、武者修業をして居る武士が、途中でいろ／＼追劔や胡麻の蠅に出會つて、それ等を取らめて行くやうな勢ひで行かなければならぬだらうと思ふ。それを何でもない事を「災難だ」と言つて普通人と同じ様にブル／＼慄へあがるのでは、何等そこに法華

行者の價值は無い譯である、武者修業に出て居る所の立派な侍が旅をするのに、女や子様が東海道を旅をするのと同じやうにビクトルして、ちよつとガタと言つてもギョツとするやうな事では、武士の價值が無いと同じ事である。法華行者は左様に僅かな事を「災難々々」と言つてはいかぬから、そこで日蓮聖人は、これは鬼神の災難にあらずして、法華經の行者を守り給ふ善神の方から信仰を試み、鍛練する爲めに來たのぢやと思ふと言はれた。斯ういふ教訓が非常に宜いのである、同じ事でも價值を考へなければならぬ。「ア、さうか、それは氣の毒な災難だ、それぢやア俺が陀羅尼品を讀んでやらう」……さういふやうな事は日蓮聖人は仰しやらない。茲に日蓮主義の價值があり、又諸君が探つて以つて今日及び將來の修養に實行して行くべき點である。それは一時の思ひつきで斯様な事を仰しやるのではない、日蓮聖人御自身の覺悟を見れば、災難の來る度毎に悦びを増して、益々人格を高めて行かれた譯である。勝鬘經などを見てもその通りである、菩薩行に入つた者は、いろ／＼の面倒な事に出會す毎に、それを以つて益々自分の精神を高めて、菩薩行を増して行くといふ事がある。事に志した以上は何事でもさうであらうと思ふ、世間の藝術なら藝術でもやはりさうである、或は柔道とか擊劍をやるのでも、先生が非常に嚴重に、寒中だからと言つて「寒いから炬燵に入つて居れ」といふやうな事は言はぬ、「素ッ裸になつてやつて來い」といふやうな譯で、それを一々辛いと思ふやうではいけないのである、どうせ人間はこの世の中を渡つて行くには、左様な奮闘力といふものを持つて行かなければいかぬ。宗教は詰

らの迷信を鼓吹するものではなくして、人格の方から奮闘の力を與へるものが宗教でなければならぬ。丁度柔道を教へて置いて自分の身に危難が及んだといふやうな時分には、その自分の力を以つて惡漢を投げ倒せといふやうに訓練するものである、「何か事があつたら直ぐ俺の所に逃げて來い、俺が行つて守つてやる」といふやうに、唯だ無闇に他力本願ばかり言うて、宗教といふものは人を弱くしてしまふ大乘佛敎の根本精神は自らの力を發揮するやうになつて居る、その精神がこの聖訓に現はれたと私は思ふのであります。



様よりは果報は上だ、自分は前世にまだちよつと業が足らなかつたから、下藪(臣下)の身とはなつたが今は朝廷をも自由にする権力を得たのだ。

院(法皇)には持明院の宮を定めよ、御位には同院の三郎宮を即けよ。さて本院(後鳥羽上皇)をば同じ國土といへども遙かに離れた隠岐の國へ流せその他の宮々も皆流せ、公卿殿上人を坂東の方へ下せ(途中で一人残らず殺してしまへ)次々の殿原には猶も芳心あるべからず、(優しうしてはいかぬ、誰も彼も親切にしてはいかぬ、残酷にやれ)悉く頭を切るべし。

これに基いて泰時が如何に計らひしかといふに實に酷い扱をするのである。

同じく(七月)十日、泰時武装して鳥羽殿へ参り弓のうらはづを以て御前の御簾をかき掲げて、「あなたはこのから流罪であります」と言ふ。

天子様に對して流罪なんて失敬千萬な事をいふ。我

ゐるとは何たる事であるか! あゝ皇道の大義何ぞかくの如く味まされしか、日本精神何ぞかくの如く地に委せしや、あゝ天に訴ふるも言葉なく地に號ばんも術あらじ!

泰時猶も、とく／＼お出なさいと責め申しければ今度は勅答あり「いや自分は決して戦をするなどといふ考はない、都を出てゆかう」

といふ御返事があつて、それから直ぐ京都を出られて、播磨の方を経て伯耆の國へ出て、隠岐の島へお流し申すのである。さてその隠岐の島の配所の光景はどうであるか、途中の有様も中々酷いけれども、配所の模様は尙更である。

かくて日數重なりければ隠岐の國へぞ着かせたまふ、是なん御所とて入れ奉るを御覽すれば、あさましげなる苫ふきの蓆の天井竹の簀子なり、をのづからなる障子の畫などに、かゝる住居を描きたるを御覽せるより外は、いつか御目にも懸るべき

國に於て朝廷に叛いた者も多くあるが、こんなことを言つた者は一人もない。否々、それどころではない。

「もう流罪に極つたから此の地に居られてはいかぬ早うお出なさい」と聲を荒らげて責め申す聲景色團魔の使に異らす。

院どもかくも御返事なかりけり、(あゝいかに悲憤無念の涙を吞まれたことであつたらう)泰時重ねて言ふには「あなたは此處に御座るとおつしやるのか、或は隠岐の國へ行くとおつしやるのか、御返事はどうでありますか、それとも猶謀叛の衆を引籠めてましますか。」

あゝ諸君これ何の辭ぞ! 一天萬乗の君に對し、天子様が臣下に對して謀叛するといふとは何事であるか、何奴であるか、實に大逆無道、言語道斷の至である。しかも後世の史家すらこの承久の亂に就ては「天皇御謀叛」なんていふことを憶面もなく書いて

これは屏風の繪などで、天子様も御覽になつたことはあるかも知れぬが、かくの如き所をお住居になさるなどは夢にもお考へになさらなかつたであらうさういふ酷い所へお移し申したのである、そうして海岸の風の荒い非常に寒いやうな所へ建て、ある。されば隠岐の院の詠みたまうた悲痛涙を絞る御歌があります。

われこそは新島守よおきの海の荒き浪風心して吹け

この御歌でもわかるやうに、非常に風の吹く波の飛沫のかゝりさうな所へお流し申して残酷なことをしたのである。これは後鳥羽上皇に對してゝあるが、その他の土御門、順徳兩上皇の阿波及び佐渡に於ける、また諸皇子に於ける御有様も推して知るべきである。また朝廷方の忠臣に對せし暴状はいふまでもない。月卿雲客は東下りと稱して、その途中悉く頭切られたが、あまり残酷なことをやるので中途に

自殺した人もあるからである。要するに「猶も芳心あるべからず、悉く頸を切るべし」といふ勢でやつたのである。

この亂より後、朝廷の威權全く衰へて、天下の權悉く武士の手に歸し、幕府は皇室繼統の議にまで容喙し、遂に兩統交立、南北朝の分裂といふ未曾有の變態を惹起するに至つたのである。あゝ……

かくして朝廷には非常に辛く當つたけれども、人民の方に向つては、この後といふものは租税を免じたり、貞永式目を作つて人民の機嫌を取つたり、諸國を行脚して民情を視察したりしてやつた。それ故後代の史家は、義時の如き、真に日本の歴史に未だ曾て無き惡逆無道の奴すら、逆賊の中に加へず、朝敵たるの汚名を免れてゐるではないか。即ち大日本史に於てすら叛臣傳の中に義時を入れず、また同じく泰時の如き奴さへ「彼は志を治安に屬まして私する所無し、中々えらい者だ、申分のない者だ」な

どと評し、しかも「承久の事は其の曲上に在り」などと非常な謬論を放ち、北條一門が似而非仁政を施したるをも善政なりなどと賞してゐるではないかあゝこれを何とか言はんや、これを何とか言はんや北島親房の「神皇正統記」といひ、水戸光圀の「大日本史」といひ、それ／＼我が皇統の尊嚴を明かにし、勤王の大義を説き「夫れ日本は神國なり」と唱へて、特にいはゆる南北朝正間の問題に就ては舉世の力を振ひ吉野の朝廷大義の存するを以て正統なりと論じたのであります。しかるにも拘らず、それに先だつて後鳥羽上皇を始め皇室が我國を本來あるがまゝなる神國の姿に返さんとせられたる、この承久の事に就てはかくの如く甚しき失當の論斷を下してゐるのである。これ皇道一貫の大精神を何としたのであらうか。後鳥羽上皇はあはれ痛ましくも一敗地に塗れたまひしも、その悲憤の御遺志を繼いで再び起たせたまうたのが即ち 後醍醐天皇であり、ま

たこれを翼賛し奉りし楠木、新田等の忠臣であり、かくて漸く建武中興の業を成し遂げらるゝに至つたのであります。その御精神は前後一貫せるものであるにも拘らず、先を非とし後を是とするは、その成ると成らざるによつて評價を異にするのである。しかしながら建武中興の業と雖も、僅に二年にして再び逆賊足利高氏のために覆へされてならず、いはゆる南北兩朝並び立ち、親房や光圀が心血を注いで明かにした皇統正間の問題は、實にこのために起つたのではなからうか、後鳥羽上皇、後醍醐天皇等の思召を眞に成就致しましたのは、申すまでもなく明治維新であります。しからば、事の成否如何に拘らず萬古を貫く大精神によつて、即ち 烈聖相傳へたまふ皇誼の御理想によつて、これを論ぜねばなりません。

大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す
天皇は神聖にして冒すべからず

かの承久の亂を「天皇御謀叛」なんていふ怪しからぬ言葉を放つやうな、否苟くも一分にても罪を皇室に歸せ奉るやうな思想は大禁物である。惜むべし我國史を論じて、勤王の思想を明かにし、以て國民の士氣を鼓舞したるこれらの「神皇正統記」や「大日本史」にも幾分か承久の亂に對してむしる朝廷を非議し奉る如き思想ありとは。これらは悉くこれを修正し、新たに正々堂々の筆を振つてこれを書き換へるべきである。而て、たとひ義時、泰時の輩が承久の亂に先だつていはゆる善政を布いてゐたとしても、君臣の分を辨へず、尊王の大義を知らず、朝威を蔑にして權を擅斷したる武門政治なるものは、斷じて我國に認めらるべきものでない、天下萬民天皇親政にあらずんば我國の大義名分は成立ちませぬ。

それをしも、北條が心を善政に用ゐてゐたのに、
天皇がこれを討たんとせられたのは 天皇がお悪い

などいふは何たる言草であるか、何たる頭であるか。

日本歴史はあくまで尊王の大義を中心としたる日本精神史であります。由來、日本歴史は、宛も一つの河の流れのやうに一つの「命」が存在しまた發達してゐる、またしてきたのであつて、而もその中の重大事といふのは、いつも皇室が先頭に立つて事を起された場合か、または皇室を指して國民の間に一大運動が起された場合か、この二つであります、これを一言でいへば、皇室中心主義である。その他の事件は皆第二義的附屬的の小事件といふべきであります。皇室中心の我國に於ては、歴史は即ち真理なりである、これが我國の特色なのである。殆ど多くの史家は鎌倉時代に於て武士道の精神が最も培養され發揮されたといふが、吾人はこれには大反對である。皇室の御稜威を知らずして、一培臣の下に鎌倉武士が動いて、天皇に對する大不忠の事

實在の根本原理

日蓮主義の認識論

認識論といへば直ちにカント流の西洋のそれを思ひ出すのであるが、是は抑々數字と自然科学についてその認識の妥當する所以を反省したものである。數字は吾々の直観の中に見出さる、時間や空間の性質に關する先天的原理が、吾々の認識の對象たる自然そのものに實際に適用される所にその妥當性を有するものであつて、凡て事物の印象は吾々が先天的に有する感性といふ直観形式の窓（即ち時間空間といふ形式）を通して吾々に知覺せらるゝが故に、この形式が吾々の凡ての印象に共通して妥當するものと考へられてゐるのである。自然科学は吾々の認識

をしでかしたるが如きは、どうしてこれを日本武士道なんていふことができやうぞ。抑も、源平、北條足利、乃至徳川等は、武門政治を以て朝威を抑へ奉るる逆賊であります。諸君、今日頻りに唱へらるゝ所を開け、天皇の統帥權の下に於てのみ武威が發揚する所に、我が皇軍建軍の本義があるのである大權の發動に非る限りは、潰武の譏を免れない。我が武はあくまで、天皇の御稜威の武でなければなりません。これが皇國の軍人精神である、これが日本武士道の精華である。

海ゆかばみづく屍、陸ゆかば草むす屍、大君のへにこそ死なぬ、かへりみはせじといふのが我が武人の、然り大日本全國民の赤心であります。鎌倉時代は、否いはゆる武門政治の間は我が武士道の潰滅期であつたのである。その間に養はれし種々なる特徴は、日本武士道の大義より見ては、たゞ裏面的觀察としてこれを認めるまでである。

商學士 中村清 一

を理解する力、即ち悟性の中に存する法則が、吾々の認識の對象としての經驗界に妥當する所にその價值を有するものであつて、その妥當する所以は是亦吾々が自然認識を構成するに當つて悟性の形式としての範疇を用ひて自然そのものを構成してゐるために他ならぬと考へてゐるのである。かくてカントに於ては自然に法則を與へるものは吾々の主觀に他ならぬとされてゐるのであるが、少くとも吾々の理性の中に存する法則が同時に感覺的な經驗界そのものにも適用される點に數字や自然科学乃至凡ての學問の基礎が存在するといふ根本思想に至つては何人も反對を唱へるものはないであらう。換言すれば理性の

法則と經驗の法則との一致、それが一切の經驗科學の根本的事實に他ならないのである。

今是と類比して日蓮主義に於ける實在認識の根據が奈邊にあるかを考へて見るに、カントに於ける思惟と經驗との代りに、覺によつて開かれる根本的實在（これを眞如といひ法性といひ實相といふ）と、現實に吾々の知つてゐる經驗界（勿論實際の經驗は實在界の全部ではないが經驗を因果の原理で押し擴げた世界即ち事の十界をいふのである）との一致、これによつて實在界の現實性と、現實界の實在性とを共に保證する構造になつてゐるのである。即ち諸法と實相とは全く一つであるといふ點からこれを諸法實相論といふのである。

これは四教の中圓教の立場に於て初めて可能となる見地である。即ち
藏—經驗の全體を因縁和合の上に立つ假の相であるとなし、又それを經驗する自我も亦五蘊の

假和合によつて生ずる無實體のものであると説く。従つて現象は苦であり、空であり、無常であり、無我であるとなし、外道の獨斷的な有と有我の見を破る。而して精神だけがこの現象的な生死の現實を解脱して眞に無我の寂靜の境涯に入つたのを有餘涅槃であるとし精神のみならずこの肉體をも滅却して眞に寂滅のものになつてしまふことを無餘涅槃といふのである。故に現實的な修行によつて現實の寂滅に歸せんとするのが三藏教の立場である。

通—現象は單に因縁より成る假のものであるのみならず根本的に無性のもの實體なきもの空のものであるとなし、その空智を得たる心は何等差別の現象に捕はれざる解脱を得て居るのみならず、その心即ち我も亦無性無實體空のものであるとして涅槃は現實界に於て得ら

る、空の智慧、即ち般若波羅蜜に他ならぬと考へる。この意味に於て現象も實在も共に空といふ見地に於て一致して居るのであるから涅槃と現實界とは相離れず、色と空とは即一してゐるのである（色即是空、空即是色）

別—現象の根源に眞實在を認て之を眞如となす。現象は眞如が無明によつて現實化する迷の姿であるから、この假の相たる迷妄の現象を離れて根本の眞如に立歸る所に涅槃があるとするのである。

圓—實在は別教のいふ如く現象を離れたものではなく、寧ろ現象をそのまゝ内に包むものであり、同時に現象そのものの中に内在するものであるとする。個別的なるものがそのまゝ普遍的な全體であり、一は即ち多、多は即ち一である。故に現象的な身を轉ぜずして其儘成佛することが出来る。之を即身成佛といふ。

藏 轉身解脱 (界内事)
通 即身解脱 (界内理)
別 轉身成佛又は往生淨土 (界外事)
圓 即身成佛 (界外理)

右の如く吾々が既に覺つてからあらはれる現實と迷つてゐる中に辿つてゐる現實とは、畢竟同一の客觀的現實界であつて唯だ迷へるものは未だその全體を見ず、六道を知つても四聖を知らず、九界を知つても佛界を意識してゐないのに反し、覺れるものには於ては單に自己の覺の境地を知つてゐるのみならず十法界の一切を如實に知るといふ點に其相違が存在するに過ぎないのである。而して迷へるものは未だ十界の全體を知らないが、一度之を覺るや同一の客觀世界即ち十法界を知るのであつて、この佛性の見

地から云へば十界の各衆生の間に何等の差別はないのである。若し二乗のみがこの覺に到達せざるものとすれば、それは二乗に取つて非眞理であり、二乗に取つて非眞理なるものは菩薩にとつても眞理たり得ない。若しも二乗が各々別々の涅槃に到達するならば、二乗各人にとつて其涅槃の實在性が保證されない。十界の誰が覺つても、その覺の内容が同一であるといふ點にその證の眞理性と實在性が保證せられることを知らねばならぬ。こゝに諸法實相、一念三千の理にとつて、二乗作佛が欠くべからざる所以の理由が見出されるわけなのである。

然し遂に二乗が作佛するとしても必ずしも前記の實在觀が完成するとは云はれない。假に二乗を含む十界の一切が大乗の覺を得るとするも、その覺の内容が單に十界の一切を含む超越的絕對者としての理であつて、前記の様な事即ち客觀的現實そのものでないとするならば、そこには理の一念三千の教義

が成立して事の一念三千は成立しない。故に迷門の教義に依て爾前の教を一步進めたといふだけでは、そこに理の一念三千が成立するだけで、必ずしも事の實在觀が成立しない。事としての實在觀が成立するには、少くとも次の三つの前提が必要とせらるゝことを忘れてはならぬ。

その第一は十界の事常住である。若しも事の十界が常住でないならば、それは實相と一つではあり得ない。又常住でないものは勿論實在でない。十界事常住が事の一念三千の欠くべからざる前提となるのはこのためである。

その第二の條件は本覺と始覺との關係である。前記の如く覺の内容が事の十界そのものであるとしても、そこに佛の覺が覺つてから以後の即ち現在及將來に亘つての事の世界のみを體驗し得るといふのと、その覺が覺つた時以前の現實界に溯つて無始以來の十界の有様を體驗し得るといふのでは、そこに著し

き差異ありといはねばならぬ。前者の場合は單に始覺のみであつて未だ始覺本覺の關係が成立してゐないが、後者の場合には覺そのものゝ有始なることを始覺と稱し、その覺の内容が無始に溯ることを本覺といふのである。この意味の本覺の思想は法華經の本門のみにあつて迷門以下の諸經には存在しない。

然らばこの本覺始覺の思想は、吾々の述べんとする實在觀の上に如何なる意義を有するかといへば、若し始覺のみで本覺のない迷門の見地に從ふならば吾々が覺つてから後の十界の實在性は勿論一應は保證せられるけれども、自分の覺る前の現實界が知ることを得ない以上この覺つてから後の十界の現實も結局眞實の實在性を得てゐないといふことになつてしまふのである。而して先に覺つた人の實在界と、後に覺つた人の實在界とは、それだけ違つたものであることになり、この點から二乗不作佛の場合と同様な不都合を生じて來ることになる。更に天台の様

に最初に理のみがあり、次に事の迷界を生じ、次にその迷へるものゝ中から覺れるものがあらはれて佛といふものが出て來るといふことになる、最初の理の存在や迷へる事の存在は如何にして知ることが出来るかといふことにもなつて來るのである。何人かの覺によつて現實に體驗せらるゝことなくして世の中に實在するものはあり得ない。主觀と客觀は相關的であつて、主觀なき客觀はなく、認識なき實在はない。而して何人かによつて體驗せらるゝといふだけではなくて、何人によつても體驗し得らるゝことが實在の根本的條件であるとするならば、本覺の思想が眞實の實在觀にとつて必要な所以は極めて明瞭であるといはねばなるまい。凡て實在的なるものは本有であると同時に、一切の主觀にとつての本覺でなければならぬ事が知られるであらう。

さて右に述べた主觀と客觀とが相離れず認識なき所に實在はあり得ないといふ點から、單に現實が

本有であり、同時に本覺であるといふばかりでなく同時にこの本覺を覺する始覺そのものが又無始實在でなければならぬといふことが、更に第三の前提として要求せらるゝであらう。而してこの始覺も實在するものとして、本覺と同じく否本覺と同一の客觀的現實そのものでなければならぬとするならば、本覺は單なる境としての無始の現實界即ち十界であるのみならず、同時に智としての人格即ち無始の佛でなければならぬ。現實に存在する人格としての佛は勿論智ばかりでなく、活動をも具へたる三身即一の現實的な人格でなければならぬのであり、而してかかる人格的な佛はやはり一個の衆生として因果の原理によつて覺を開いた個別的な具象的な人格でなければならぬ。かくて法界には無始以來かくの如き個別的具象的な事實の佛があり、その佛が同時に一切衆生の本覺として本來具有せらるゝものでなければならず、又その佛が現實の佛として、無始盡十方

に吾等衆生を救ふ大活動をなし給ふものでなければならぬ。かくの如き個別的にして同時に遍滿的な無始の佛を本佛と名付けるならば—而して壽量品は我等の世尊釋迦牟尼佛が即ちかくの如き本佛にてましますことを示す—本佛の實在は一切のものゝ實在性を保證する最後の鍵であるといふことが知らるゝであらう。

以上は本佛實在の積極的論證ではなくて、單に凡てのものゝ實在性を確立する基礎條件として之を述べたのである。一切の眞理は本佛實在の上に立つ。壽量品は單に吾等の解脱にとつて究竟の成佛にとつて絶對的に必要な教義であるばかりでなく、爾前速門の一切の教義を盡龍點睛する認識論上の鍵として、あらゆる眞理の最上位に立つ。而して今述べたることが決して予一個の意見でなく日蓮聖人の教義に於ても重要な一つの要素であることを示す意味に於てあへて十法界事といふ御書の研究を推奨する。

法華經講話

(第十三講)

文學士 小林 一郎

妙法蓮華經序品第一 (承前)

前回には、序品の中の、文殊菩薩の答のところで菩薩行すなはち六波羅蜜といふことの途中まで讀んで居りました。今日はその續きであります。

お釋迦様の御一代に於ても、さういふやうな順序で説法されたのでありますけれども、すべての佛の教を説かれる順序は大體同じ道である、即ち一番初めは小乗の教、口元の方から説き始めて、それからだん／＼と大乘に及ぶといふことであります。その大乘の教といふのは所謂菩薩の道を教へられたもので、その菩薩の道を大體に於て纏めましたのが六波

羅蜜の行である。その中の「布施」と「持戒」と「忍辱」といふ三つに就て、この前一通り申しました。その他に

精進
禪定
智慧

といふことがあります。これが六つ揃つて六波羅蜜、譯して申せば六度と言ふのであります。今日はその「精進」の事から一通り申上げたいと思ひます。「精進」といふのは難いが無いといふことです。人間の心の中にはいろ／＼な心持が雜つて居る。自分で

氣の附かない間に、いろ／＼な考へなくとも宜いことを考へて居たり、覺えなくても宜い事が頭に残つたり致します、これを取拂はないといふと、本當の事は考へられない。一體人間といふものは不精者と

いふ譯ではないでせうけれども、要らない事に頭腦を使ふから結局大事な事には力が入らないので、結果は不精といふやうなことになる。だから精といふことが必要です。純粹にする、要らないものを頭腦の中から抛り出してしまつて、大事な事だけを頭腦の中に入れて置くといふことが必要ナンです。私共學校で學生によく言ふのですが、「どうも君達の頭腦に紙屑が餘計入つて居て仕様がな、新聞を讀んだり、雜誌を讀んだりして、さういふものが一パイ入つて居る。紙屑籠みたいになつて居る。いろ／＼な事を一パイ頭に入れて居るからどうも善い事が入らない。頭腦を一つ掃除して紙屑を出してしまはなければいけない」と能く言ふのでありますが、人間

切取つて棄てる。さうして人間として守らなければならぬ事がハッキリと捉つたならば、その方に向つて進む、斯ういふのが所謂精進です。「進」といふのは途中で弛んではいけなから、進むといふ以上は、退轉せず、途中で後歸りしないといふことを考へなければいかぬ。前へ行つたり後へ戻つたりして居つては、結局なんにもならないから、人間として守るべき道を確りと考へて、「これが善い事だ」と思つたら、その方に向つて進んで行く。その進んで行くのを途中で止まつたり、途中で後戻りしないやうにして行く。斯ういふことが精進であります。これはなにも佛敎ばかりではない、何でもさうでせう學問をするのでも、商賣をするのでも、どんな仕事をしたつて、所謂精進といふことなしに仕事は出来るものでない。嫌やになつたら止めてしまふ、障りがあつたら廢すといふやうなことをやつて居つたんでは、何の事でも出来はしませぬから、飽造もその

の力には限りがある。身の力も心の力も限りがあり、ますから、その限り有る力を以て、限り無くつまらない事に注意して居るならば、結局何の役にも立たぬことになる。それでこの精といふことが大事です。精といふのは雜りが無いやうに、人間として最も大事なことだけを考へる。さうしてつまらない事はサツサと忘れてしまふといふことです。

近頃では、教育をするといふのは物を覺えることだといふやうな意味になつて、なんでも覺えろ／＼と言ふ。覺えが悪いといふと叱られるのです。けれども覺えるのが大事なら忘れるのも大事なので、ごつちかと言へば忘れることが最も大事である。つまらない事を覺えて居るから大事な事が少しも頭腦に入りはしない。つまらない事は出来るだけ忘れることです。覺えたつて役に立たないのであるから、忘ればいけない。

それで精といつて純粹にする、つまらない事を一

方に進むといふことが必要ナンです。

所がその精進するのに障りになるものは何だといふと、眼の前の利害損失を考へるといふ心持、これが障りになる。本當の利害損失なら宜しいけれども凡夫はどうも眼の前の事を考へる。今時分の現在の所に現れて来る利害得失ばかり考へて、得のあることならやるけれども、損の行くことはやらない。儲かりさうならやるけれども、儲からないやうなら止める。斯ういふ風に眼前の利害損失のみ考へるといふことがどうも吾々の癖です。それだから精進が出来なくなる。折角やつてもどうも工合が悪いと止してしまふ。「こんな事をやつて居るのは合はない」と言ふ。けれども人生は始終變るものだから、今眼の前の利益が必しも永遠の利益とは言へない。眼の前の損失が必しも永遠の損失でもないのです。だから若し眼の前の利害損失ばかりを考へて居る人は、結局得も損もない、何にも譯がわからずに一生

を終ることになつてしまふ。そこを考へて將來を見なければいけない。だから眼前の事に執はれる人は畢竟精進が出来ない。貫いて行くといふことが無いものだから、何をしても物にならない譯です。さういふやうな心持を以ていつでも將來の先まで考へて自分の善いと思ふ事には墓地に進んで行くといふ心持、それが所謂精進であります。この精進の心持がないと、如何に尊い教を習ひましても、その習つた事がたゞ一時の事になつて永遠の力になり得ない。所がその精進といふことは非常に善い事でありますけれども、熱心になるといふこと、夢中になるといふことは違ふ。これが一緒になつては困る。精進は結構、何でも一生懸命にやるといふことは善い事であるけれども、夢中になつてしまつては少しも見當が附かなくなる。そこで熱心にはなるが宜いが夢中になつてはならぬといふのでその次に「禪定」といふことが必要になつて来る。心をしづめて考へ

るといふことが大事である。無茶苦茶になつて、なんでも構はずやつつけるといふやうなことで、結局船が山に上るやうなことになる。吾々は如何なる場合に於ても「今自分は何をして居るのか」といふことを知らなければいけない。自分の足は何處に立つて居るか、自分の眼は何を見て居るか、自分の體の周圍には何かあるかといふことを辨へなければいけない。それを忘れてしまつて、たゞ無茶苦茶に熱心になると見當が附かなくなつてしまふ。それで禪定といふことが必要になる。心をしづめて自分の現在の立場を考へる。さうして今自分は何をして居るのだ。今自分の立場は何處に在るのだ、今自分の周圍には如何なる事が集まつて居るのだといふことを靜かに分別することが必要になつて来る。これが禪定です。

とかく人間は夢中になるものだからわからなくなつてしまふ。甚などを打つて居るのを見るとさうで

す。マア上手、名人は格別だが、吾々の知つて居る程度の連中は、初段に井目置いてそれでも負けるといふやうな連中です。斯ういふ連中が碁を打つて居るのを見ると、夢中になつてしまふからわからない局外から見ると、「そんな打ち方があるか、どうした」と言ふけれども、本人は一向氣が附かない。局に當る者は迷ふといふことを能く申すけれども、どうもそれである。だからいつでも、どんな危急な場合に於ても、どんな切迫した時に於ても、自分の足下を見なければいけない。自分の今居る場所を能く分別しなければいかぬ。これは大事な事でありませう。それが所謂禪定です。

「禪」といふのは、一體印度の言葉で「禪那」といふ。たゞ此の言葉は日本に長く弘まつて居るものだから、禪といふ字だけを見て、なにか靜かとか、落着きとかいふやうな意味に解釋する人がありますけれども、元來禪といふ字にはそんな意味は無いので

す。たゞ印度の梵語の禪那といふのを漢字に書きあらはしたゞけであつて、禪といふ字そのものに別段の意味は無い。禪那といふ印度のことばは、これを支那のことばに譯すれば、「靜慮」と譯する、心を靜かにするといふことであります。それから「定」といふのは文字の通りで、心が靜かになれば、自分の心が動かないで定まつて來ますから、チャンと定まつた方に向けられる、それで「禪定」といふ。心を靜かに落着けてドツシリと前後左右を分別して考へること、これを「禪定」と言ふのです。

世の中が忙しくなればなるほど、さういふ修行が大事です。世間の人は忙しいといふと、忙しい事ばかりに執はれるけれども、それは大變な間違ひであつて、世の中が忙しくなればなるほど、その忙しい中に飛込んで行く人の心は確りとした所がなければならぬ譯です。車の輪が非常に忙しく廻つて居る時にはその車の心棒といふものは確りとして居なけ

ればならぬ。心棒がグラ／＼して居ると、車が激しく廻れば壊れてしまふ。激しく廻る車の心棒は、どんな事があつても動かぬやうに、確りと固くなつて居なければならぬと同じやうに、激しい世の中に處する爲には、吾々自分の心に、どんな事があつても動かぬやうに確りとした所がなければならぬ。世の中が忙しいから自分も落着きがないといふやうなことで、忙しい世の中に處して人間として履むべき道を完うして行くことは難しい。だから今の世の中又これから後の世の中はモット忙しくなるのでありませうが、その忙しくなるに従つて、尙ほ更自分としての心持は確りと落着くやうにする。この修行が最も大事であります。

忙しいといふことが一體どの程度のものですか、私共は始終友達などに「忙しい」と言はれるたびに、不思議に思ふのです。どうも朝から晩まで忙しくて堪らぬと言ふ人がある。「君は佛教だナン

といふことを言つて居るが、佛教ナンといふことを迎も考へられはしない。どうも毎日忙しいので、そんな事を考へて居る暇は無い」と言ふ人が、私共の友達に随分ある。所がその男を見ると、頭を綺麗にコスメチックで光らして分けて居る。髯を毎日剃つて居る、新しい洋服を着て自動車に乗つて歩いて居る。そこで私は言ふ。「君は忙しい」と言ふけれども、頭を毎日分けて居るぢやないか、その暇はあるだらう、髯を毎日剃つて居るぢやないか、その暇はある。飯も三度食ふだらう、その暇もある。洋服も垢だらけのカラやワイシャツは着ては居ない。新しい物に着換へる暇はある。お湯にも入るだらう、その暇もある。穢ないことを言ふやうですが、便所へ行く暇もあるだらう。君は随分暇があるぢやないか。それで忙しいから人生の事は考へる暇が無いと言ふのはなんだか一體譯がわからない。飯は食ふけれども世の中の事は考へられない。顔は洗ふけれど

も自分の心は穢なくてもその儘だといふのは譯がわからないぢやないか。何が一體忙しいのだ」といふことを能く言つてやるのでありますが、どんなに忙しいと言つても、一日の中に、朝起きるから夜寝るまでに、二十分や三十分の暇を作つて、静かに自分の今やつて居る事を考へて見る。自分の前後の行ひに就いて反省して見るといふ、それだけの暇の作れない筈はない。夜八時間寝るのを七時間半にしたつて決して神経衰弱になりはしない。熟睡すれば半分

でも宜いのである。飯を三杯食ふのを二杯半食つたつて、決して栄養不良になりはしない、能く嚼んで食へばそれで宜い。だから人生の大事な問題を考へる暇が無いといふ筈はない。それをつまらない事に頭腦を使つて、つまらない事に暇を使つて、「忙しい」と言つて、さうして人間の世の中の大事な事を考へないといふことは、これほど愚かな事は無い筈であります。だから誰でも禪定は出来る。静か

に考へて見るどんなに忙しい時だつてその暇の作れないといふ筈はない。作れないといふのはその人の料簡が悪いからである。少し亂暴な事を言ふやうですけれども、今の世の中の政治家とか實業家とかいふやうな人を見ると、私はいつでもさう感ずる。「忙しい」と言つて居ながら、要りもしない事に暇を使つて居る。さうして大事な事には暇を使はないこれは實に愚かな事でありませう。

英吉利の總理大臣を幾度もやりましたグラッドストーンといふ人は、これは近世での大政治家であります、そのグラッドストーンが總理大臣であつた時に折々自分の別荘へ行つて引込んでしまふ。この人はスコットランドの人であります、スコットランドの田舎に、別荘と言つても極く粗末な小屋のやうなものだつたさうですが、其處へ入つて三日も四日も出て行かない。さうして静かに本を讀んだり、又山の間を歩きまして權の親爺やなにかと話をしたりし

て居る。そこで夫人が大變に心配致しまして、「さういふ事をして居て宜いのですか、あなたは總理大臣で大變忙しい身分やありませぬか、一時間だつてナカノ疎かに出来ないやうな地位でありながら二日も三日もこんな山の中に入り込んでしまつて人に會はないナンテ、そんな事をして居てどうするのですか」斯う言ふとグラッドストーンは笑つて「いやこれが國の爲だ、決して俺は國を忘れて居やしない折々斯ういふ所に引込んで静かに考へるから、國民の爲、國家の爲に斯うやつたら宜いといふことが本當に思ひ浮ぶのである。此處へ引込んでしまつて人に會はずに居るといふことが、本當に國の爲ナンだといふ返事をして居つたさうであります、確にさうであります。人間は時折は静かに考へるといふことをしなければ、知らず識らずの間に自分が間違つた道に入り込んで、その自覺なくして終るのである行き掛りでだん／＼と泥の中に入つてしまふ。であ

りますからどんな忙しい時でも、どうかして暇を作つて静かに考へるといふことがどうしても大事な事でありませぬ。それで「禪定」といふことを教へられるのは洵に尤もなことであります。法華經の中には、ズット先の方に斯ういふことが説かれて居ります。

「深く禪定に入つて十方の佛を見る。」

(深入三禪定一見十方佛)

人間がジツと考へた時に、そこで初めて佛を見るといふのは、佛様と一緒に居るやうな気分になれる。たゞ眼の前の事ばかりをやつて慥て居つたのでは確りした心持になれない、深く禪定に入つてジツと考へた時に、初めて十方の世界の佛様を見るといふのは、眼の前に佛様の相が現れる譯ではない。佛と一緒に居るやうな気分になり、心が佛と通ふやうになる。斯ういふ事が言つてあります。洵にその通りでありまして、どうしても人間としてはそれだけの

餘裕を作つて、静かに物を考へるといふことが必要です。

その次に「智慧」といふのは、物を正しく見る力を言ふのであります。この頃では「あの人は智慧の有る人だ」といふと、世の中を巧みに通つて行く人の事を智慧の有る人だと申すやうであります、それとは違ひます。この智慧といふことは、總ての物の實相(本當の相)を知ることです。物を幾ら澤山知つても、いゝ加減に表面だけ知つたのでは、限り無く多くの事を知つた所が、その知つたといふことは大して役には立ちませぬ。物の本當の相を知らなければいけない。實相を知るといふことが智慧である。これは心に執はれる所があつてはいけない。心が偏つて居りますと自分の都合の好い方ばかりを見て本當の事が見えない。それで智慧を磨くといふのは、心の迷ひが無くなつて行かなければ、智慧を磨くことは出来ない。人間は誰でもその性質、その境

遇、その周囲の事情などに依つて支配されるのが常であります。さういふ色々な事に支配されて居りますと、本當の事が本當に見えないのです。物の形がテンで本當に見えない、自分の心がグラ／＼して居れば物の聲が本當に聴えない、そんな状態であれば幾ら澤山物を知つたつても本當に知つたとは言へない。所謂實相は得られない。

昔の話に斯ういふ事があります。この頃も相撲をやつて居りますが、昔は回向院といふお寺の境内で小屋掛けをして相撲を取つて居つた。吾々の子供の時はさうでした。兩國橋を渡つた所に櫓があつて、その櫓の上で朝早くから太鼓をドンドコ叩いて居つたものです。どういふ風に叩くのか知りませぬが、盛に叩いて居る。その櫓の下を歩いて居る人が、その太鼓の音を聴いてどう思ふかといふと、相當に金があつて快い氣持で歩いて居る人がその櫓の下を通ると、ドンドコ／＼といふ音が「入つて来い／＼」

といふやうに聴えるさうです。それから金が無くして淋しい心持で櫓の下を歩いて居ると、同じ太鼓のドンドコといふのが『出て行け』といふやうに聴えるといふ。別に向ふでは何と思つて叩いて居る譯ではないだらうけれども、自分の氣持です『金が有るから相撲でも見ようかな』と思つて歩いて居るとドンドコ／＼入つて来い／＼と聴える。『どうも見たいけれども入れないナ』と思つて居ると、ドンドコ／＼出て行け／＼と聴えるといふ、それが人情です。總てがそんな譯で、自分の心持で物の聲もいろ／＼に聴えるし、自分の心持で物の相もいろ／＼に見えるのであります。だから氣分の好い時には、人が笑つて居ると、『彼奴は愛嬌がよい』と言ふ。人がツンとして居ると、『彼奴は眞面目でよい』と言ふ。氣分が悪い時には、人が笑つて居ると、『彼奴なんだ人を馬鹿にして居る』と言ふ。ツンとして居ると、『彼奴愛嬌が無くて仕様がな』と言ふ。猫がニヤ

ンと言ふのを聴いても、氣分が悪い時には頭を撫でてやる、氣分の悪い時には蹴飛ばしてしまふ。さういふ風に物が本當に見えはしない。本當に聴えはしない。自分の心が始終動搖して居つた日には、何を見たつて本當に見えない、何を聴いたつて本當に聴えない、そこを捨てなければいけない。さういふ迷つた心持を取捨て、總ての物を眞實の相を知れといふことであります。それが所謂智慧を磨くといふことです。だから智慧を求めるといふことは、たゞ物を知るといふことではないのであります。智慧といふことは、本當に智慧が成就すれば佛様でありますから、智慧を成就するといふことを此處で簡単に説き盡すことは出来ませぬけれども、大體私共が物を見たり聞いたりする場合に於ては、いつの場合でも三つの點に注意しなければならぬ。物の違ふ所を知らなければならず、物の一致して居ることを知らなければならず、さうしてそれを纏めて

見なければならぬ。これを

有……………差別觀
空……………平等觀
中……………統一觀

と言ひます。有といふのは差別觀、空といふのは平等觀、中といふのは統一觀、この三つの觀方が揃はなければ物を觀たとは言へない、物を知つたとは言へない譯です。そこで第一の差別觀、これは又ウツカツしては居られない、物は皆違ふのです。世の中に同じ物といふのはありはしませぬ。どんな物だつて、同じいと言つても何處か違ふ。丁度人の顔が違ふ通り、誰だつて皆顔が違ふ。兄弟でよく似て居る親子でよく似て居ると言つても、そっくり同じでは無い、何處か違ふ。花が咲いて見たつて、櫻の花が咲いて同じやうな恰好をして居ると言ふけれども、向ふの花とこつちの花と比べて見ると何處か違ふ。決して世の中にそっくり同じといふものは一つもあ

りはない。その違ひをよく見分けて、總ての物が違つて居るナといふことを知る。これが所謂差別觀です。これ無しには活きた世の中は渡れない。

所が差別はあるけれども、その違つて居るものを集めて、その同じ所を探して行くと同じ點はある。この席にお集りになつて居る皆様も、お顔は皆違ふけれども、上に眼があつて、真中に鼻があつて、下に口があるといふことは同じである。人間にも馬鹿もあれば惘口もあり、善人もあれば悪人もある。併し人間として共通な性質は何處かにある。それが『空』といふ平等觀、同じ所を見て行く。これが偏つてはいけない、差別觀ばかりに執はれてはいかぬし、平等觀にばかり執はれてはいけない。兩方見なければいけない。違ふと言へば皆違ふ。併しながらその違ふ中に於て平等な變らないものがあるといふことを考へなければいけません。そこでその違ひながら同じである。同じであるけ

れどもそこに違ひがあるといふことを兩方纏めて見ますと、それが統一観、それを「中」と言ふ。有と空とを究め得て後に中といふことが出来て来る。違ふと言へば皆違ふけれども、併し違はない所がある斯うなるのであります。

今までは、宗教といふと、何か差別を離れるのが宗教だといふやうにばかり考へられて居つたやうであります。佛様は人間を皆同じやうに慈悲の眼を以て見て下さる、だから吾々も佛様の通りの心持を以て、一切の人間を同じやうに取扱はなければいかぬ」斯ういふ風なことを能く言ふ人がある。併ながら一切の人間を同じやうに教ふならば、その人々に應じて違つた取扱ひをしなければ、一切の人を教ふことは出来ない。皆同じに取扱つて行つたんでは誰も教ふことは出来はしない、その所は餘程確かり考へないといけません例へば親があつて子供を五人なら五人持つて居れば

その子供は同じやうに可愛がるでせう。長男でも末の子でもその間に差別は無い筈であります。差別が無い筈だから、それなら總ての子供を、皆同じやうな着物を着せて、同じやうな食べ物を食べさせるかそんなことは出来はしない。長男は十八だと言へばこれは鰻飯を食べさせれば喜ぶ、牛肉を食べさせれば喜ぶ。鰻のフライでも、カツレツでも何でも喜んで食べる。所が末の子は三つだといふ、この三つの子供に鰻飯や鰻のフライなどを食べさせた日には、腹を下痢して死んでしまふ。だから十八の子供は子供のやうにうまい物を食べさせるが宜いけれども、二つや三つの子供は子供のやうに、牡蠣のフライだのカツレツだの食べさせないで、乳を飲まして置けば宜い。それが平等です。愛するといふ心持は平等である。年取つた者は年取つたやうに取扱ひ、小さい者は小さいやうに取扱ひ、各々その者に適當な處置をしてやるといふこと、それが平等の慈悲であ

つて、同じ物を食べさせて同じ着物を着せるといふことが決して平等の慈悲ではない。その所は能く考へなければいけない。

今の世の中は何だか知らんが平等々々といふ聲が盛であつて、皆同じに取扱つて貰ひたいと言ふけれども、皆同じに取扱つたならば、或る者は宜いだらうけれども、或る者は駄目ナンです。赤ん坊に牛肉を食べさせるやうな事をして何になるかといふことを能く考へなければならぬ。だから平等といふ點を注意して、而も差別的のいろ／＼な細かい事に心を用ひて行く、斯ういふことが本當の人間の道でせう。着物だつてさうでせう。身に適するやうな着物を着るといふことがそれが平等観です。併ながら身に適するやうにするが爲には、冬は綿入を重ねて着るが宜いし、夏は單衣を着るが宜い。それが差別であります。いつでも同じにするからと言つて、十二月に着たやうな綿入を六月、七月に着て居つて、これ

が平等だといつてもそれは平等にならない。だからいつでも違ひといふことを見て、さうしてたゞ違ふだけではない。その結局の目的は平等に存する斯ういふ風に見て行くのであります。それが差別と平等、さうしてそれを統一する中といふ観方であります。真中の所を探つて行くといふ観方であります。これはたゞ一二の例を申上げたのでありますけれども、すべて私共が物を觀察致します時には、さういふやうに差別的の點を確りと見極めて、平等の點を見極めて、さうして後にこれを纏めて行くといふ、斯ういふ考を忘れないやうにして行けば、本當の智慧を成就することが出来て来る。今の私共は凡夫でありますけれども、だん／＼に進んで行けば佛様に近いところの智慧も出来るでせう。これが先づ大體の六度の説明であります。詳しく申せば際限がないが、大難把に申せば斯ういふことであります。そこでこの六つが互ひに聯絡を持つて

行くのであります。布施と言つて人に恵みを施さうと思ふと、自分の考が足りない、人に善い事をしてやらうと思つたのが悪いことになるから、自分の心を確りとさせなければならぬ。それには持戒といつて佛の戒を持たなければいけない。戒を持つことは結構だけれども、自分は正直だからと言つて、人の不正直を腹を立つやうなことでは駄目だから、自分は正しく置いて、人は間違つてもそれに怒りを發さないといふ忍辱が必要である。所が忍辱といつてどうでも宜いといふやうな宥す心持は大事だけれども、その宥す心持があまり度を越すと、人を宥すのは宜いが、自分まで宥すやうになる。「マアどつちでも宜いや」といふと、氣が廣いけれども、自分もどつちでも宜いでは困つてしまふ。だから精進といふことが必要になる、人に對しては飽達宥さなければいかぬけれども、自分自身としては、自分の爲すべき事に驀地に進んで行く、決して心を餘所

へ向けてはいかぬ、斯うなつて行く、所が精進をやつて居つて熱心は結構だが、熱心が過ぎて夢中になつてしまふと物事がわからなくなるから、禪定といつて靜かに考へる。自分の立場を考へ、自分の身を置いて居る所を能く知る。斯ういふことが大事になる。所が心をしづめることは大事だけれども、しづめて居るばかりではいかぬから、今度は總ての物事の眞實の相を見極めて、さうして自分の心のはたきを出来るだけ善い事に役に立つやうに向けて行く。斯うなつて来る。だからこの六つが順々に繋つて行く。さうして智慧が成就して物の相が本當にわかる。世の中の憐れな人の憐れな事が尙更に能くわかつて来る。世の中の迷つて居る者の氣の毒な事が能くわかつて来るから、これから又逆戻りして、どうぞ自分の骨折で他の人を救ひたいといふ布施の心になつて行く。だからこの六度といふものは循環して行くのであります。

斯ういふ風に六度といふことが教へられて居りますので、私共は一日の日を送つて、その一日の終りに於て自分を振り返つて見るのであります。自分の今日一日やつた事が果してこの六度の標準に適つて居つたらうか、居ないだらうかといふ事を振り返つて見るが宜い。例へば商人が商賣をして居る、お役人が役所に勤めて居る、學校の先生が學校に行くといふ場合にどうだらう。今日一日の自分が仕事をするのに、布施の積りで、人に恵を施すつもりでやつたらうか。それとも月給が欲しい、儲けが欲しいとばかり考へてやつたらうか、どうだらう。斯ういふやうに自分を考へて見る。さうして布施のつもりでやつたならば海に結構だが、月給が欲しいとか儲けが欲しいとばかり考へてやつたならばこれは本當ではない。明日から一つやり直さう。斯う考へる。それから又モウ一つ自分の今日一日やつた事は、持戒といつて、佛様の戒に適ふやうにやつたらうか、そ

れども放逸な我儘な心持でやつたらうか。斯う考へて見る。若し我儘な心持が多かつたならば、今日は失敗つたから明日からやり直さう。それから又自分は今今日どうだつたらう。人が少しばかり間違つた事をしたといつて、腹を立つやうなことをしなかつたか。本當に忍辱といつて、人の過誤を宥すやうな氣分で居たらうかどうだらうかと考へて見る。どうもさう行かなかつた。つい腹を立てたり何かをした。これはいけない。明日から直さう。斯ういふやうにこの六つの事は、日々を行ひを調べる標準でありますから、この標準で調べて見る。自分は今日一日精進であつたかどうか、自分の爲すべき事に全力を注いだかどうか。心が他に移つたことはなかつたらうかと考へて見る。又今日自分は禪定といつて、己れの立場を能く靜かに振り返つて見るといふことをやつたかどうか、夢中になつて出鱈目をやつたことはなかつたか、斯う考へて見る、或は又自分は智慧の眼

を以て物の眞實の相を見て居つたかどうか、見違へて飛んでもない見當違ひの事をやらなかつたらうかといふやうに、自分の行ひをこの六つの標準に依つて調べて見て、この標準に合へば嬉しいが、合はないう事が一つでもあつたならば直して行かう。斯ういふやうにして行きますと、今は凡夫でありませうけれども、凡夫の境界から少しづつでも佛の境界に近いて行ける筈であります。ですからこの六つは吾々の行ひを調べるところの標準であるといふ風に言へるのであります。

そこで佛様は諸の菩薩の爲に、それに適當なるところの六波羅蜜をお説きになつて、さうして結局は

阿耨多羅三藐三菩提を得、一切種智を成せしめ
たまふ。

(令得阿耨多羅三藐三菩提一切種智と)

阿耨多羅三藐三菩提といふのは佛様の智慧であります

これに加へるものが無い。しかし其の知るといふのは正偏で、正しくさうして總てに偏く總ての事を皆知らなければいけない。總ての事を皆知らなければいけないが、たゞいろいろな事を知つて居るだけではいかなぬから、それが正しくチャンと統一を持たなければいぬ。そこで正偏といつて、正しくして、偏く知る。これが偏りますと本當の智慧にならぬ。この頃ではいろいろな事を澤山知ることが學問の目的のやうに思つて居るから、偏の方は餘程出來て居るけれども、正の方が足らない。あの事もこの事も知つて居るが、結局何の事だかわからないとなる。それから又正しいといふことも善いけれども、正しいことばかり考へて居つても、世の中といふものはいろいろ變化致しますから、變化して行く世の中の事がわからぬと、正しいのは正しくても偏つて居る所謂偏狭な、コチ／＼な世間の役に立たぬものになつても困る。だから正しくしてさうして偏くといふ

すが、佛と同じ智慧を成ずることの出来るやうに衆生を導いて行かれた。

「阿耨多羅三藐三菩提」といふことは、前にも申しましたけれども、この場合モウ一度繰返して申しますと、これは佛様の智慧といふことで、若し細かに譯せば

阿耨多羅三藐三菩提
無上 正偏智

「阿」は「無」といふことの意味、「耨多羅」は「上」といふ意味、「三藐」は「正しい」といふ意味、「三」は「偏し」といふ意味、「菩提」は「智慧」といふ意味でありまして、「阿耨多羅三藐三菩提」といふことを漢語に譯せば「無上正偏知」となる譯です。これが佛様の智慧である。この上も無い智慧といふのは、人生の事なり、宇宙萬有の事なり、スツカリ知り盡して居る智慧でありますから、この上も無い

ことが大事である。

英吉利のハミルトンといふ學者がその事を良く言つて居ります。どうもいろいろな事を知つて居る人は纏りが附かなくて困る。それから一つの事に深く入る人は偏つて居つて融通が利かなくて困る。それではいぬ。だから總てに注意して、さうして一つの事に深入するやうにならなければいぬと申しまして、漏斗のやうにしろと言つて居る。これはなかなか／＼うまい譬へです。漏斗といふのは上が廣くて、此處に水を入れると下に纏つて出て来る。その漏斗のやうにやれと言ふ。總てにズツと行き渡つて、さうして歸着する所は一つであるといふ風にやらなければいけない。皿のやうではいけない、チューブのやうでもない。漏斗のやうに廣く總てに渡つてさうして一つ所に纏つて行く。物を知るといふのはさういふ知り方をしなければいぬといふことを、英吉利の哲人ハミルトンが言つて居りますが、如何

にもその通りでありまして、佛様が物を御存知になるのは正偏であります。正しく統一があつて、さうして偏く總てに行き渡つて居る。これが佛の智慧であります。吾々は凡夫であるけれども、修行をするにはさういふ理想を持つて行かなければならぬ。

それが阿耨多羅三藐三菩提で、佛様の具へて居る智慧です。いろ／＼「四諦」とか「十二因縁」とか「六波羅蜜」とかいふことを修行して行きました結局は何處へ行くかと言へば、「阿耨多羅三藐三菩提」といふ佛様の具へて居らつしやると同じい所の、この上も無い正しき偏き智慧を成するやうになつて行くそれがマア信心といふこと目的であります。

さうして「一切種智を成ぜしめたまふ」とあります。此の一切種智といふことを考へなければいけない。一切のものゝそれゝの性質を皆見極める。それが一切種智といふことを考へなければいけない。一切のものゝそれゝの性質を皆見極める。それが

一切種智です。大雑把に總てを見るだけではないかな。總ての物の本當の性質を見極めて、どんな人間に對しても、どんな場合に於ても、どんな出来事に會つても各々その宜しきを得るやうな智慧を具へるといふことが一切種智を成するといふことです。佛様はさういふ風に大勢の人間を導いて下さるといふのであります。

次に復た佛有す、亦日月燈明と名く。次に復た佛有す、亦日月燈明と名く。是の如く二萬佛、皆同じく一字にして、日月燈明と號く。又同じく一姓にして頗羅墮を姓とせり。

(次復有佛、亦名日月燈明。次復有佛、亦名日月燈明。如是二萬佛、皆同一字、號日月燈明。又同一姓、姓頗羅墮。)

その次に亦佛が出られて、その佛も前の佛と同じやうに日月燈明といふ名の佛であつた。次に亦佛が出られて、その佛も日月燈明といふ名の佛であつ

た。斯の如く澤山の佛様が續いてお出でになりましてたけれども、皆同じ名前であつて、日月燈明といふ佛であつた。それから又その佛様の姓も同じ姓であつて、頗羅墮といふ姓であつた。頗羅墮といふのは印度の言葉で、捷疾とか、利根とかいふやうな意味であります。

彌勒當を知るべし。初佛 後佛 皆同じく一字にして日月燈明と名け、十號具足したまへり。

(彌勒當知、初佛後佛、皆同一字、名日月燈明、十號具足)

そこで佛様は幾人出ても同じ名であつた。本當の事といふものは二種無いから、幾ら佛様が出ても皆同じお名前だといふことは、言ひ換へれば同じ徳を具へて居らつしやるといふことであります。即ち大慈悲を以て一切の人をお救ひになる佛様、さうして日月の如く、燈明の如く、明かな智慧を以て一切の人の心をお照しになるといふ佛様である。十號具足と

いふのは前に申した「如來」から「佛世尊」といふまで十の徳が残らず具はつて居らつしやる。

説きたまふ所の法、初中後善なり

(所ニ可説法、初中後善)

さうしてその佛様が、大勢の爲にお説き下さるところの法、教といふものは、初めも善ければ中頃も善ければ、後も善ければ皆善い教ばかりである。

そこで「法」といふ字に就てこの場合チョット申上げて置きたいのですが、法といふ字はいろ／＼な意味に使ひます。この講義の一番最初にも少し申しましたけれども、普通は佛教などでなしに、世間的の考から言ふと、法といふ字は「法度」或は「法規」といふやうに使はれます。人間が、お前達は斯うしなければならぬぞとさめたものを法と言ふ。規則、法律、これが普通の意味でせう。さういふ意味で法といふ字を使つて居る人も多い。吾々が始終、支配されて居ることでも、例へば民法といふものが

あり商法といふものがあり、刑法といふものがあり、何々法といふものが澤山ありますが、その法は法度若くは法規の意味であつて、お前達は斯ういふことをしろ、斯ういふことをやつてはならないぞといふやうに、人間の當に爲すべき所をさめる。又してはならない事をさめる。それが法といふ言葉の初めの意味です。浅い意味です。これは無くてはならない人間テンデンばら／＼に勝手な事をやつた日には、世の中は逆も治まるものではありませぬから、そこで皆が幸福のやうに皆が都合の好いやうに生活する爲には、法度若くは法規をさめる、これはなにも王様が一人できめたものでもなければ總理大臣が一人できめた譯でもない。社會の要求に應じて自然にさういふ事がさまるのですが、これが初めの意味であつて低い意味です。だから人間として一番下の程度は、此の法規に觸れなければ宜い、泥棒もしないし人殺しもしないし、税もチャンと出すし、年頃にも

なれば兵隊にも行くしといふやうに、法度法規に觸れない人であれば一人前の人である。あまり善い方ではないが、マア大して悪くもない程度であります。けれどもその法度とか法規とかいふものは、人の心の中に立入ることは出来ない。泥棒すればそれは法律に依つて縛つてしまふ。人を殺せば法律に依つて制裁するけれども、盗みたいと思つたつてそれは制裁する譯に行かない。此奴は泥棒しさうな面附きだと言つて、捕へて牢屋に放り込む譯には行かない隣りの奴の頭をボカツとやつて傷を附ければ法律に觸れる。けれども「憎い奴だ」と思つて拳骨を拵へただけでは、これは法律に觸れない。「貴様拳骨を拵へたから怪しからん」といつて拘留する譯に行かない。斯ういふ譯だから、法度、法規といふものは形に現れた點に於て人間を正しき方に向けるものであつて、その心の中までは立入らないのである。だからこれに反かぬといふ人間はさう大して善い人間

ではない。まあコンマ以下と言ふか、地平線ぐらゐの人間です。

所がそれであつてはこの人生といふものは決して善くならない。皆が法度に觸れないで、皆が間違つた事をしないといふ程度であつては、人生の進歩も無く、人生の幸福もありませぬ。そこで第二の意味に於てモウ少し善い法を作りませぬ、それが「教法」であります。教といふものがなければならぬ。教といふものは人間の心の中に立入つて、お前の心の中を善くしろと言ふ。形の上に現れたゞけ善くたつてそれは駄目ですから、お前の心の一つ正しくして、心を清かにする。人に迷惑を掛けないといふだけではいけない、人を憐んで、人を救うて、人を恵んでそれに喜びを感じるといふ位な、モット高尚なモット進んだ心持を作るやうにしろ、斯ういふ事が所謂教法です。だから教といふことになる。「法」といふ字が法度とか法規とかいふよりもモウ少し高尚な

意味になる。モウ少し深い意味になる。佛が法を説くといふのはそれである。教法を説く、教を説くのであつて、決して法律だけを説くのではない。學校に於て人に教へるといふのも教法です。即ち心の中に入つて行く。それでなければ世の中は善くならなないであるから法といふ字は第二の意味で、更に深い意味に於ては教法の意味になる。法を説くといふのは教を説くことであり、法を學ぶといふのは教を學ぶことになる。

所がモウ少しこれを深入して見る。その教といふものはどうして説くのか、何故佛なり、聖人なり、賢人なりが教を説くかといふと、それは佛様が特別に發明して、自分が言ひたいから言ふといふ譯ではないのであつて、人間といふもの、本來の性質を見極めて、斯ういふのが本當に善い人間だといふことを突止めて教を説かれる、或は又人間といふものが地面を踏んで空の下に住んで居つて、山も川もあり

草も木もある。この一切の物に對しても、人間は人間としての態度を執らなければならぬ。人間さへ宜ければ他のものはどうでも宜いといふことはない譯だから、教といふもの、根本は、人間なり世の中の有ゆるもの、本當の性質を見極めて、そこで教を立てるのでせう。勝手に教を立てるのではない。人間の人間らしい本當の性質を見極めてそこで教が立つその人間の本當の性質に背いた教ならば、その教といふものはやがて廢れてしまふ。役に立たなくなる人間の思想が幼稚であつた時には、あまり本當でない教が行はれたこともあつたでせうけれども、さういふものは、モツと優れた人間が出来れば廢められてしまふ。だから第三の意味に行く。法といふものは「理法」「真理」といふやうな意味になる。本當の道、本當の理、それを法と言ふことになりまふ。だから妙法蓮華經と言ふ時の「妙法」といふのはこの三つの意味をスツカリ含んで居る。これは又後

にも解釋が出来る。さういふやうな絶對の真理ではありませんが故に、初め説かれたことも、中頃説かれたことも、最後に説かれたことも皆完全無缺な教であつて、それはいつ迄經つても變らないところの尊いものである。斯ういふ意味であります。

其の最後の佛、未だ出家したまはざりし時、八王子有り。

(其最後佛、未だ出家時、有八王子)

さういふ風にいろいろな佛様が出られて、その最後の佛様が未だ出家しなかつた時に——佛様といふのは修行して佛に成るのでから、先づ出家をするこの出家をすることは、お釋迦様はその必要がありましたから、王様の子と生れながらその王様の御殿を出て、さうして諸國を經廻つて、いろいろな學者に就いて教を聞いたのであります、それはその必要があつたからです。今の吾々はそんな事はしなくても宜い。なにも親父を置いて、女房や子供を置

でモウ少し先に行く。その事を詳しく言はなければなりませぬが、「妙法」と言ふ時の法はこの三つの意味をスツカリ含んで居る。第一に言へば、人間の守らなければならぬ法度、法則がある。モツと進んで言へば、人間の心を建直す教である。モツと進んで言へば真理である。永久に變らないところの本當の道理の上に立つたものである。斯ういふのであります。だから法といふ字を三つの意味に解釋するその三つの意味がスツカリ含まれたものが本當の法である。吾々が法を守るとか、法を重んずるとかいふことは、その三つの意味がスツカリ含まれた意味で申すのであります。

そこで今「説きたまふ所の法」といふのは、一通りの意味だけ言ふと教といふ意味でありますけれども、その教が第一に法度、法則になりまふし、それからその内容を言ふと、真理であつて、永久に變らないところの真理を説かれたのである。斯ういふ風

いて逃さなくても宜い。何故なら今の吾々は、佛様のお説きになつた斯ういふ經典が残つて居るのだから、その經典は家に居つて女房や子供と一緒に居つて讀むことが出来るから、今の吾々はなにも家を飛出さなくても宜い。お釋迦様の當時には、出版物も開けて居なければ、本も無いから、王様の御殿に居つては修行が出来ないから、王様の御殿から飛出したのであります、吾々はその眞似をするには及ばない。けれどもお釋迦様が御出家になる時のその心持は、やはり吾々が學ばなければならぬ。だから形を學ばずして心を學ばなければならぬ譯です。いつの時代でもさうでせう。昔の人を學ぶといふことは心を學ぶことであつて、形を學ぶことではない。形は學べないのです。「國の爲に忠義を盡せ、楠正成は忠臣だ」といつても、別に今戦も無いのに吾々が討死をする必要はない。楠正成は淡川で討死をした。自分も何處かで討死をしようといつて、江

戸川で討死をしたつて始まらない。「親孝行は結構だ。親孝行は曾我兄弟が手本だ、親の敵を討ちたい」と言つても、親父が生きて居れば敵の討ちやうがない。だから形を學ぶことはいけない。心を學ばなければいかぬ。それを心をいゝ加減にして形を學ばうとするから、教といふものが死んだものになつてしまふ、多くはさうでせう。學校などで教へるのは形を多く教へる、だからいけない。「曾我兄弟は十八年の間親の敵を尋ねた、お前達ぐづぐづしてはいけない」と言つても、親父はチャンと生きて居る。さういふ風に形を學ぶからいけない。「静御前といふ女は義經に貞節を盡して、頼朝に従へと言はれたけれども、鎌倉の鶴ヶ岡で舞を舞つて自分の心持を表はした。女の手本だ」と言つても、今の人が別に舞を舞ふ所もありはしない。自分の亭主が家に居るのに、餘所へ行つて踊りを踊るにも及ばないといふことになるから、そこで身に行ふことは場合に依つて

違ふ、が、心は同じ心持でなければならぬ。

そこで出家するには、

出家
身出家
心出家

と二つあつて、妻子を捨て、眷族を棄て、山の中に入つて修行するのは身の出家であつて、その身の出家は學ぶには及ばぬけれども、心の出家は學んで行かなければならぬ。心の出家といふのはどういふのかと言へば、世の中に居りながら世の中の爲に執れない心持を作る。それが心の出家で、これが大事です。世の中に執はれてはいけない。自分が世の中を導かうと思へば、世間より一段高い所に眼を着けて居なければならぬ、それが心出家です。商賣をして居つても宜しい、役所に勤めて居つても宜しい、何をして居つても宜しいが、自分の心持は世の中より一段高い所に居つて、さうして世の中を能く見渡して、世の中の人を導いて高い所に引張つてやるや

うな気分で見なければならぬ。それが心出家で、これはモウ誰でも必要な事でありませう。ですから佛教に於て出家が大事だといふのはその意味であります。必しも頭を剃つて法衣を着るには及びませぬ。けれどもいつでも心は出家して居なければならぬ。世間に執はれて居つてはならぬ。身ばかり出家して居つても、心が世間に従つて居るならばそれは出家でも何でもありません。俺は出家だと言ひながら「お布施を早く寄せ」と言つて見たり、俺は出家だと言ひながら電車の中で足を踏まれて「この野郎ッ」と怒鳴つて見たり……それでは出家でも何でもありません。形を真似て居るだけの話である。形はどうでも宜しい、心が大事であります。それで佛様に成るのには出家しなければならぬといふのが通則であります。出家しなければならぬといふことは心の問題であります。

そこで今この所は、一番終ひの佛様が出家をなさ

る時、また修行にお出掛けにならない時に、八人の王子があつたといふのであります。

一を有意と名け、二を善意と名け、三を無量意と名け、四を實意と名け、五を増意と名け、六を除疑意と名け、七を警意と名け、八を法意と名く。

(一名有意、二名善意、三名無量意、四名實意、五名増意、六名除疑意、七名警意、八名法意)

斯ういふ八人の王子があつた。これは別に大して説明をする必要もありませぬが、教を求めめるのには皆良い名前です。「有意」の有といふのは差別といふことで、物の違ふ所を一々詳しく調べて行つて覺りの道に入る。これも一つの仕方であります。それから「善意」といふのは、善は完全といふこと、物の完全な、缺點の無いものを求めて行く心持、これも善い心持であります。それから「無量意」といふのは、どこ迄も善くなりたいと思つて、途中

でモウこれで澤山だといふことの無いやうな心持で
あります。それから「實意」といふのは徳のことで
あります。最も勝れた徳を具へたいといふ心持。そ
れから「増意」この増といふのは面白い、今善くな
つたらモット善くなりたいたい、斯ういふのが増といふ
ことであります。これは必要なことです、モウこ
の邊で澤山だと思つてはいけない、モット善くなり
たい、善くなつたら又モット善くなりたいたいといふ心
持、それが増意であります。それから「除疑意」疑
ひを除くといふのは妥協することではない、疑はし
い事があるならば飽迄その疑ひを除いて、疑ひが無
くなるまで修行したいといふ心持。それから「警意」
これは教へる人と教へられる人との心持が相感應す
ること、それを警と言ふ、音がすれば響く、所謂感
應です。威儀といふことは非常に大事な事でありま
す、こつちが威すれば向ふが應ずる、向ふが威すれ
ばこつちが應ずる、それが威儀であります。これが

(是八王子、威徳自在、各領四天下)

この「威」といふ字をどうも讀み違へていけないの
ですが、威儀ナンといふ言葉がありまして、この威
といふ字を日本語で「おどす」と讀んだ。これはどう
かして間違へて支那の字を讀んでしまつたのです。
絲絨の鏡などといふ絨の字がやはりこれです。おど
すといふから、なにか威儀といふのは、威儀といふ
させることだと思ふけれどもさうではない。「威」と
いふ字は威化するといふ字です。だから威徳といふ
のは、自分の徳に依つて周囲の人をスツカリ威化出
来るやうな徳を有つて居る。威儀といふのは自分が
行儀が良くて、自分の顔つき、身つき、手の動かし
方、足の動かし方が善くて、自然に周囲の人がそれ
に導かれて正しくなるやうな行ひのことを威儀と言
ふ。威といふ字は決しておどすといふ意味ではあり
ませぬ、威儀といふ字は決して行くとい
ふそんな意味ではない。佛には威徳があると申しま

片方ではいけない、片便りではいけない、こつちが
威すれば向ふが應ずるにきまつて居る。向ふから人
が来る「あの人はなんだか善きやうな人だな」と思
つて、こつちが笑ひ顔をすれば向ふもやはり笑ひ顔
をする「向ふから来る奴は變な奴だな、なんだ、變
な面をして居るナ」と思つて、こつちが嫌やな顔を
して額に八の字を寄せると、向ふの人も、「なんだ
彼奴、變な面をして居る」と言つて、向ふも八の字
を寄せるやうになる。結局世の中は威と應である。
兩方の心が通はなければいけない、さうなつて初め
て世の中が圓滿になります、それを響きと申します。
それから「法意」法といふのは前に申した法であり
ます、その法を求めたいといふ心持。斯ういふ名前
の王子であつた。名前といふものはその人の性質を
表はすから、こんなやうな性質を有つた王子様が八
人あつたといふのです。

是の八王子威徳自在にして各四天下を領す。

す、或は威儀を重んずると申します。皆威といふ字
は周圍に威化を及ぼす、影響を及ぼすことでありま
す。

そこでその八王子は、威徳自在にして各四天下を
領する。四天下といふのはこれは餘程廣くといふ意
味です。印度の昔の言ひ傳へに、須彌山といふ山が
真ん中にあつて、その須彌山の東西南北を各天下と
言つて、四方の天下と言つて居りますけれども、こ
れはそれ程の意味ではない、たゞ廣い所を領して居
つたといふ意味に取れば宜しい。

是の諸の王子、父出家して阿耨多羅三藐三菩提
を得たまへりと聞き、悉く王位を捨て、亦隨ひ
て出家して大乘の意を發し、常に梵行を修して
皆法師と爲れり。

(是諸王子、聞父出家、得阿耨多羅三藐三菩提、悉
捨王位、亦隨出家、發大乘意、常修梵行、皆爲
法師)

この大勢の王子達が、自分の父が出家してだんたく修行を積んで佛様の境界に到達されたといふことを聞いて、悉く王の位を捨て、亦隨て出家して、さうして大乘の意を發した。チア此の大乘の心持といふことです、茲まで來ると少し詳しく言はなければならぬ。小乗と大乘といふことは前から幾度も申しました、所が今茲で白狀すると、前に言つたのはいい加減の所で済まして置いたのです。今までは斯ういふ風に私は説明して置いた。小乗といふのは自分の心の迷ひとか罪とかを除くことを目的とした教それが小乗だ、大乘といふのは自分一人助かるばかりでなくして、他の人までも善い道に入れるやうな心持を修行するのが大乘だ、だから大乘の修行をするのが菩薩だ、斯ういふやうに申して來ました。所がこれは實はごまかしである、何故ごまかして置いたかと言へば、それはマアその必要があつたので、その邊にして置かないとあまり面倒な事を初めから

教へるものではない。小さい四つ五つの子供がそこに轉んで居れば、私は背負つてやるけれども、四十二貫の大男が轉んで居る時には私は背負つて行けない。背負つたらこつちが潰れてしまふ。だから自分が人を教はうとすれば、人より以上の徳を具へ、人より以上の智慧を具へて居なければ人を教ふことは出来るものではない。さうすると今まで私の申した説明は出鱈目になるでせう、自分一人の迷ひを除くと言つたつて、自分一人の迷ひを除くならば人を教ふことになる、人を教ふことを志とするといつたつて、人を教ふつもりなら自分を善くしなければいかぬことになる。さうすると大乘と小乗の區別は立ちはしない。だから阿含經といふのが先づ小乗の經典だと言はれて居るけれども、阿含を讀んで見ると、やはり人が苦しい時には一緒に同情を表してやれ、人が喜ぶ時には一緒に喜んでやれといふことを説いて居る。要するに自分一人といふことは無い筈です

言つてはわからなくなるからその邊にして置いたのでありませう。けれども小乗といふのは自分自身の迷ひを除くもので、大乘といふのは一切の人を教ふのだといふ、斯ういふ説明の仕方は、なにも私が發明したのではない、昔の人が言つて居るけれどもそれは本當の説明ではないのです。何故かと言へば、自分一人が行ひを慎んで少しも間違ひの無い事をやるやうになれば、人を感化しようと思はないでも、自然に周圍の人を善くすることが出来る。口で何も言はなくとも、その人の行ひが立派で、その人が間違つた事をしないといふ人が、一人此處に居れば、周圍の人が自然それに感化されて善くなるにきまつて居る、だから己れの一身を善くするといふことは、結局周圍を善くすることになるので、無理に周圍を教はうと思はなくとも、完全な行ひをして居るといふことは、自然に周圍を善くして居るので。又人を教はうといふ人が、自分が善くならないで人が

一緒に世の中を造つて居るのだから……さうすると大乘と小乗の區別といふものは、今まで一通り述べて見たけれども、それでは徹底的に考へるとわからぬことになる。自分一人を善くすることが結局人の爲にもなるのです。又人の爲に盡さうとすれば自分を善くしなければならぬから、自利といふこと、利他といふこと、自分を利するといふこと、人を利するといふことは通じて一にならなければいかぬ。人の爲にと思へば自分を善くしなければならぬ、自分を善くしなへすれば人は教へる。さうなつたら大乘と小乗の區別はわからぬことになる。それならば何處が違ふかといふと、それは斯ういふ事です。大乘といふのは佛に成らない間は自ら足れりとしなないといふこと、それが大乘です。本當の大乘といふのは、自分がだんたく修行して行つて佛様と同じになるまでは修行を止めない、少しばかり物がわかつたからといつてそれで満足しない、少し

ばかり人に恵を施して人が感謝したからといつて、それで満足しない、人間は佛性を具へて居る、佛様と同じ尊い性質の種があるのだから、この佛性を發揮して結局は佛と同じになりたい。その佛と同じになりたい、その佛と同じにならない間は、少しばかり善い事をしたといつて満足はしない、少しばかり世間から尊敬されたといつてそれで自惚れない、斯ういふ事があります。それが本當の大乗であります。今茲に「大乘の意を發し」といふのはこれであり、今は自分は凡夫だが佛の境界に到達するまでは決して心を弛めまい、力を緩めまいと言ふ、それが大乘の意であります。それを途中で以て少しばかりわかつたからといつて、「モウこれで澤山だ」と思へば、その澤山だと思つた時にその人間は小乗になつてしまふ。そこは餘程大事な事であり、法華經は大乗だから法華經を讀みさへすれば大乗だ」と思つてはいけません。法華經を讀んで居つても、

少しばかりわかつたので得意になつて、「なんだ、貴様達は俗人だ、俺は偉からう」と思つたら、法華經を讀みながら、その人は小乗の輩になつてしまふ、大乘といふのは、佛に成るまでは努力を止めまいといふこの精神、最も勝れた境界に行くまでの間は、だん／＼途中だ、まだ／＼こんな事ではいけないと思ふ、それが本當の意味の大乗の心持であります。その心持の出來たのが本當の菩薩です。菩薩といふものはいつでもさうです、佛に成るまでは努力を止めまいといふ、所謂不退轉の心持がなければいけない、途中で後へ退つてはいかない、途中から又餘所へ向いてはいけない、不退轉の心持を確り徹底しなければ大乘を學んだ者は言へない譯です。どうも私共は凡夫だから、他の人間と比べて少し自分が頭を出して居ると、モウ自惚れてしまふ。これは悪い料簡です。宮本武藏といふ人が斯ういふ事を言つて居ります、自分は十二、三の時から諸國を

修業して、五十を過ぎるまでの間一回も負けたりしなかつた。それで自分は得意だつた、誰も皆俺より強い者は無いのだ、天下無敵と思つて居つた。所が五十過ぎてから、縦ひ相手が幾ら負けたりして、相手が皆へつばこなら、へつばこを負しても少しも得意になることはないぢやないか、勝てるのが偉いのではない、誰を相手にして勝つたか、それを考へなければいかぬ、へつばこな奴を皆負しても少しも偉くないぢやないかど氣が附いた。それから本當に劍を執る道に心が向たといふことを自分で言つて居る。それはさうです、皆を負したと言つても、相手がつまらない奴ばかりなら當然の話である。又誰を負さなくても、自分が本當の道を守つて居つたらそれが尊いのでありまして、決して、加減な所で、世間からなにか珍しがられたからといつて自惚れることもなにも要らない譯であります。それが所謂大乘の意であります。佛様に近くなる迄は、完全無缺な行

ひの出來るまでは止めない。斯ういふ事であり、そこで「大乘の意を發し」た、どうぞ自分も佛と同じものになりたいものだ、今の自分は凡夫だが、だん／＼修行を積んで佛と同じになりたいナ、斯ういふ心持を發した。さうして常に「梵行を修す」といつて、淨らかな迷ひを離れた行ひを修めて、さうして「皆法師と爲」つた。「法師」といふのは、佛様の教を世の中に弘める責任を果す者となつたといふのであります。前に申したやうに、佛といふものが出て、佛が教をお説きになつた。けれども佛様はいつでも世の中に居らつしやるものではない、世の中に出て教をお説きになりまして、然るべき時機が來れば世の中を捨て、吾々の間から去つてしまはれるのでありますから、佛はいつでもお眼に掛ることは出來ないのであります。併ながら佛の遺された法と即ち教といふものは永久にあるのでありますから、そこで法の有る間は佛が

居らつしやると同じだ、斯う考へられる。併ながら佛の教といふものは非常に深い意味がありますし、ヒョットその教を見たり聞いたりしたのでは、十分に意味がわかる譯がないから、その法を本當に究めて、これを世の中に弘める人が必要になつて来る。それが法師です。

所がそれは一人で出来る事でない。だん／＼世の中は複雑になつて参りますし、又お釋迦様のやうな特別の方は容易に出るものではないから、吾々の分際と致しましては、一人の力で以て教をスツカリ究めることは出来ない。又一人の力で教を世の中に弘めることも出来ない。そこで皆協力一致しなければならぬといふので、教を弘める者のことを「僧」と言ひます。僧は和合の意味で和合一致してやらなければいかにぬ。今日お互ひが斯ういふ會を作つて居るのもその和合の意味で、皆でやる、一人ではなかないけない。お釋迦様のやうな方が出られれば一人

でも宜いでせう「唯我一人能く救護を爲す」と仰しやつたけれども、吾々はなか／＼お釋迦様のやうな方ではないから、どんなに學問があり智慧があるといつても、一人で出来ることではないから、そこで皆が集まつて和合一致して佛の教を學ぼう、さうしてそれが有難いと思つたら、皆で和合一致してこの教を世に弘めよう、斯ういふ心持で和合一致した大勢の事を僧と言ふ。それがあつて初めて佛のお遺しになつた法といふものが、活きた命を有つて世の中に弘まつて行くのであります。だから佛様は洵に有難いのであります。佛様が居らつしやらなくてもその遺された法が有難い、又その法を弘める爲に和合一致する人の力も有難い、斯ういふので、この三つを合せて「佛法僧の三寶」と言ふ。吾々は洵に凡夫であるけれども、どうかこの僧といふ心持を失はないやうにしたい、和合一致してお互ひに學ぶべき所は學び、究むべき所は究め、さうして又それが有

難いと思つたら、自分の利害損得を捨て、世の中に弘める。斯ういふ心持が僧の心持であります。今では僧といふと頭を剃つて法衣を着た人の事を僧と申しますけれども、初めの意味で言へば、誰でも、俗人でも宜い、自分の私心私意を捨て、和合一致すればそれが僧であります。

所がその和合一致するといふことは、理窟だけではいけない、理窟から言へば「吾々は凡夫だから修行して佛様に成るやうになる爲に努力するのは當然だ」これは理窟ですけれども、併ながら理窟をいくら考へても、日常の行ひの上に現すやうにして行かなければ、その理窟といふものは通らない。だから和合といふものを二つに分けて、

和 理 和

にする。道理の上になつても、皆和合一致しなければいかにぬ。同じ尊い佛の教を學ぶのだから、自分の學

ぶ所は結局一つでなければいかにぬといふことは、これは理窟である。その理窟ばかり言つて居らないで、事といふのは實行であります。實行する上に於てお互ひが我儘を捨て、さうして協力して行く、この方が事とあります。理窟ばかりではいけない、實行して行かなければ和合一致といふものは出来るものではない。實際やつて見るとなか／＼思ふやうに行かない。「皆一緒に法華經を弘めませう」と言つて見るけれども、僧て人が集まつて来ると思ふやうに行かない。例へば寄合をするといつても、一人は八時に来ると言つて八時半に来た。一人は八時に来ると言つて七時半に来た。「どうも八時と言ふから、八時には間に合はないと思つて少し早目に來ました」といふ人がある。「どうも八時に來ようと思つたけれども、電車が停電したので……」といつて八時半に来る人もある。銘々テント／＼ばら／＼です。其のテント／＼ばら／＼の人々がみな自分の私見を捨て、

なるべく他の人の迷惑にならないやうに、なるべく他の人の都合の好いやうにと、實行の上で和合一致する修行をしなければ、理窟の上でいくら和合一致すると言つてもそれは行はれない事でありませう。そこで事と理と兩方揃はなければ本當の和合が出来ないのであります。心の土臺が確りして居れば、それが行ひに現れるといふことも本當ですけれども、又行ひに現すことを努めて行くと、心までが善くなつて行くといふことも本當でありまして、内から外に現れ、或は外から内を正す、斯ういふやうになつて行かないと本當の和合が出来ない。それで僧といふことは易しいやうでありますけれども、なか／＼難しいのです。

その事を茲に申して居ります、**「梵行を修して皆法師と爲る」**。法師と爲るといふのは、所謂理和と事とを具へて、道理の上で言へば佛の教と一致するやうにする。又實際の行ひの上に於ては各自の私を

その人は皆法師といふことが言へる譯であります。これは過去の世の佛の事ですけれども、その昔の事を想ひ出して、これから今のお釋迦様もさういふ事を理想として教をお説きになるのだらうから、お互にこれから一つ坐り直して、眞面目になつて、お釋迦様の仰しやる事を伺つて、さうして自分達も實行するやうに努めようぢやないか、斯ういふ話になつて參る譯であります。

(第十三講了)



捨て、和合一致し協力して行くといふことをやる。さうしてこの王様のお子様達が、親が佛になつたその志を繼いで教を弘めたとあるのであります。

これを過去の事と思はないで、やはり吾々の日常の上に於てもこの心持でやつて行くといふ氣分になれば洵に宜しい。和といふことを捨てはならぬ、和といふのは私を去るといふ事です、自分勝手な捨てなければ和合といふものは出来るものではない、皆が「俺が／＼」と言つてやつて居つた日には到底和合一致は出来ない。であるから道理の上では私を捨てるといふのは佛に一致するといふこと、それが道理の上の和合です。それから行ひの上に於ては、お互ひ三人寄つたら三人同士、自分勝手に捨て、他の人の都合の好いやうに圖つてやる。斯ういふ事が事實の上の和合であります。要するに自分の小さい私を捨てるといふことに於て初めて和合が出来る、その和合して教を世に弘める事に力を盡すならば、

本部新年會

左記の通り新年會相催度候間奮つて御參加相成度此段謹告仕候

(御參加の方は四日迄に御一報のこと)

日時 一月七日(月)午後五時開會―七時半閉會
之豫定

會場 小石川區音羽町 統一會館

差定 法要(席上)、感話、開糧、懇談等(講堂)

會費 金壹圓也

昭和十年元旦

財團 統一團

電話牛込五三三六番

記事と教信

本部 團報

御遺文問題 昭和九年十一月十日東京日日新聞に「日蓮宗の聖典を断乎發禁處分か」といふ初稿の見出しで内務省が、今春京都平樂寺から浅井要麟氏編輯の昭和重修日蓮聖人遺文全案下巻にある字句が不穏だから新規定に照して其削除關係者に要求したので、こゝに日蓮宗に於ては大問題としてある云々の記事が掲載された爲めに、ある人達はこれを布教の好材であるとし、ある者は煽動し、又ある方面では憤慨する等若干の波紋を興へたらしめ、地方からも其の真相を詳報せられたといふ御照會状も舞ひ込んでゐる次第である。然るに該記事を一讀する時に、宗門の人々にとつては新聞記者のいかにも宗教に就て無知であるかを見、又かゝる記事に依つて社會に多大なる悪影響を興ふるかを悲しむ、畢竟新聞が從來どれ程社會を善化助長せしめたかを心ある人は嘆じて居るが、今は暫く措く。

さて本團に於ては其の夕刊記事を見た翌日早速其真相を確めて、一大處に吠へ萬大賞を傳ふの愚を致さざるやう極めて慎重なる態度を持して、各方面と提携懇談を重ねてゐる次第で、違からずこの問題は圓滿に解決されることに善處しつゝありますから、此際お互に確固たる金剛信に安住して、今後永き年月に如何なる難關に遭遇するも種々悦びを増す、而して大善は大福よりの聖訓を色讀して行きたいのであります。畢竟大聖人の御人格を正しく世人に知悉せしむることが根本ではありますまいか。私共は大懺悔を致します。法華經講堂 回を重ねる數十、將に一經の中心正宗分に入りました。熱誠な求道の士女は忙しさを、寒さも、遠きも事とせず益々至心を傾けて難信難解の妙法を體得されつゝあることは、有て自他の法處にのみ止まるものであります。人に及ぼす前に先づ自ら修めよ。

各御遺族有志參詣のもとに文學士小西日喜師和賀義見師等に依つて其遺傳の法要と講演が營まれた。

九日 第二日曜日例會は修法後商學士中村清二「聖訓を拜して」といふ題で、大聖人の御遺文を體系的に懇説され、讀いて文學士小西日喜師「義士と義人の信仰」に就て極めて有意義の法話ありて後、懇談時餘にして教會

十六日 第三日曜日例會は修法後 梶木顯正師の「天理教と對論の顛末」及び本郷日當氏の「釋尊の成道と我等の信仰」と題して熱辯を振はれた。殊に梶木師が天理教と去る十二月九日對論されし狀況は一般へのよき考證と思ふので、次第に其詳報を掲げる豫定である

横濱教誌

當地 十一月中の法要と、その講師は、次の如くであつた。

十一月四日 夜 神奈川高郡氏方にて「信仰の力」 磯部先生。

○九日 夜 磯子町廣地の高橋氏方にて小西上人と磯部先生。

○十二日 夜 蒔田日山家利七日忌同向と講

話、「信の根柢」磯部先生。

○十三日 午後三時 保土谷區味岡町平岡氏方にて小西上人。

○十四日 中區千歳町高田氏方にて「佐渡御書を拜して」磯部先生。

○十六日 夜 神奈川區榮町石毛氏方にて小西上人。

○十八日 夜 神奈川區三ツ澤の岩上氏方にて、小西上人と磯部先生。

○廿四日 夜 磯子町大内氏方にて「感憤興起」磯部先生。

○廿七日 夜 神奈川區三ツ澤の齋藤氏方にて小西上人。

福島教信

十月二十七日 日本精神大講演會を公會堂に開く、眞の日本精神は日蓮主義の研究よりの確信を持つて

開會の辭 岩井支部長

泉道と日蓮主義 河合勝明先生

人生と信仰 磯部滿事先生

皇道と軍縮會議 井上清純閣下

閉會の辭 岩淵經夫氏

數百の聴衆（恐らく五百名位であらう）は終り迄熱心に聞いてゐた殊に知識階級の多かつたことと大なる喜びである。

十一月十七日 夜 中川日史師一行を迎へて日蓮主義大講演會を福ビルに於て開催した。

日蓮主義と日本精神 岩淵經夫氏

吾人の覺悟 三谷布教師

佛敎復興と日蓮主義 中川日史師

講堂の聴衆悉く圓睡を吞んで師の一言一句ものがすまいと眞鍮に聴いてゐた。甚重なる句調適切な例、しかも體驗からはとほしり出づる講話は期待以上に大成功であつた。

十二月八日 高商日蓮聖人讚仰會例會

宗教信仰の意義 磯部滿事先生

同 夜 統一關支部例會

信仰と團體觀念 磯部滿事先生

當日は元氣な若人が多く、今や新興日本を背負つて立つ青年が日蓮主義を指導原理として強き團結を結ばんと集りつゝある傾向は實に心強い事である。尙磯部先生は同夜深更歸京されたが我々はいつしながら先生の獻身的努力を深く感謝する。

二本松教報

十月十五日 社會事業二本松佛敎不染會托鉢修行す。

同 十九日 夜 蓮華寺に於て龍口法難會修行 龍口御法難に就て 中嶋元道師。

十一月十五日 二本松佛敎不染會托鉢修行す

同 十七日 夜 福島市福ビル階上にて中川監督布教師三谷布教師の講演會を開催す。

同 十八日 本久寺御會式修行す、三谷布教師玉島英龍師本量義師の講演あり。

同 十九日 蓮華寺御會式修行す新築本堂も大體完成し二ヶ年の歳月と五千六百有餘圓也を投じて面目を一新せり。

新築本堂にて法要と講演あり講師は左に

（晝夜二回） 中川監督布教師、三谷布教師、中島元道師 玉島英龍師、菅野顯孝師。

同 廿日 午後一時五十二分獨立守備隊歩兵第二大隊嶋田英作氏の遺骨通過す、因つて出迎讀經す。

貴族院議員 佐藤鐵太郎閣下題辭
海軍中將 井上清純閣下序文
貴族院議員 井上清純閣下序文
男爵 井上清純閣下序文
統事一團 上田辰卯居士序文
理事長 上田辰卯居士序文

皇道と日蓮主義

文學士 河合 陟 明著

菊版上質 二三五頁 定價壹圓(送料負擔)
團員及學生特賣中半額

井上閣下序文の一節

予が同門の篤信學者河合陟明氏深く世態を憂ひ、一片の道念黙止し難く、慨然筆を呵して本書一卷を著述せらる。高き尊皇愛國の至誠と深き崇神信佛の信心より湧出し來りて、言々愛國の響があり、句々信仰の涙があります。朗々として諷詠すべく、潜々として著者と共に泣くべきものがあります。本書は無上正法の一實國家に冥合して内國民の人格を薰化し、國家の理想と實力とを整へ、外人類の幸福を保障し、文明の完成に寄與すること日の東方に昇りて西を照すが如きを信知し、「一身徧く悦び兩眼瀟の如し」と感激せられた日蓮聖人と血脈相通じたる血涙の文字であります。轉輪聖國の靈力と最勝經王の妙化に感觸せんとする凡ての人士の切に熟讀玩味を俟つ次第である。

目次

第一章 皇道精神に就て 第一節 皇道復活の曙光 第二節 皇道の内容とその運用 一、皇道の宗教性—慶を積む大平和主義— 二、皇道の中軸とする文化的發展—暉を重ぬる大進歩主義— 三、皇道の世界に及び徳化—正を養ふ大統一主義— 第三節 皇道の思想的根柢に就て 第二章 日蓮主義信仰内容と皇道 第四節 日蓮主義の國體觀 一、佛教の國家的大教義 二、轉輪聖王の理想 三、國家七不衰の法 四、戰爭に關する示教 五、平等思想と勤王 六、佛陀と明教と皇國の使命 七、國史と佛教 八、日蓮聖人の勤王 九、法華經に顯されたる宇宙國體の思想 一、法界(宇宙)は本佛の威徳を中心とする一大國體なり 二、國史を通觀して皇道擁護の名教を確立せよ 第六節 本佛の人格實在と感應の妙義 一、本佛の圓慈觀 二、本佛の相好實在論 日蓮聖人の示教 三、本佛の大神秘 四、日蓮聖人の信仰體驗 五、人生活動の靈源 第七節 本佛を根源とする文化の統一—統一神教の理想— 一、佛教信仰の統一 二、汎神論と一神論との統一 三、人文史上に於ける佛教の統一 第八節 本佛の靈光と皇室の御稜威 一、皇道の淵源と本佛の靈徳 二、祖宗の神靈と天皇の御稜威 三、日蓮教學の本尊に顯されたる皇國の使命 第九節 信仰の社會的實踐と現實的國家生活 結論 日蓮主義の立場より皇道を讚美して國民に檄す。

發行所

東京市小石川區音羽町六丁目十七番地
財團法人 統

振替東京九四二〇番
電話牛込五三三六番

謹賀新年

昭和十年元旦

財團法人 統一團

謹賀新年

昭和十年元旦

同師會

謹賀新年

知法思國會

謹賀新年

報恩閣

東京市淺草區新橋井町

大日本立正會館

東京市江戸川區逆井千葉縣市川町

日蓮主義 本佛教會

東京市瀧野川區瀧野川

恭賀新年

橫濱市神奈川區三ツ澤

財團法人 統一團橫濱支部

福島市 大町

財團法人 統一團福島支部

萩市 西田町

財團法人 統一團萩支部

福島高商日蓮聖人 鑽仰會

本多禮三

東京市品川區南品川

本郷常次郎

東京市四谷區須賀町

大森妙道會

東京市大森區山谷

中島元道

福島縣二本松

寄附金維持及團費誌料領收

(自十一月二十一日
至十二月十七日)

一金貳圓五拾錢也	富山 石原重太郎殿	一金六圓也	福島 中村 美津殿	一金六圓也	東京 市川第十郎殿	舒同縣 石井 智明殿
一金四拾八錢也	大阪府 山乃神傳道閣殿	一金貳圓五拾錢也	横濱 稻葉いく子殿	一金五圓也	同 山田 英二殿	西宮 岸 邦太郎殿
一金五拾錢也	東京 森山 春吉殿	一金參圓也	同 高部 靜子殿	一金貳圓五拾錢也	同 櫻井しげ子殿	横濱 伊藤 喜造殿
一金貳圓四拾錢也	愛媛縣 廣田 竹吉殿	一金貳圓也	東京 日下部 二葉殿	一金壹圓貳拾錢也	同 土屋 喜久殿	東京 市川第十郎殿
一金壹圓貳拾錢也	愛知縣 中村新太郎殿	一金貳圓也	沼部彌太郎殿	一金四圓五拾錢也	同 漢路 吉岡正太郎殿	同 津山 渡邊 孝殿
一金五圓也	東京 小西 日喜殿	一金貳圓貳拾錢也	同 伊藤 和歌殿	一金貳圓貳拾錢也	同 津山 渡邊 孝殿	同 福山 三谷 完市殿
一金貳圓五拾錢也	同 増子 西治殿	一金壹圓貳拾錢也	同 荒木 運成殿	一金貳圓貳拾錢也	同 福山 三谷 完市殿	
一金貳拾圓也	千葉縣 市川立正會殿	一金壹圓貳拾錢也	同 遠藤 實照殿			
一金壹圓貳拾錢也	横濱 京田爲太郎殿	一金貳拾壹錢也	東京 金森 義男殿			
一金貳圓五拾錢也	同 齊田 貴司殿	一金貳圓五拾錢也	同 松本 宮子殿			
一金貳圓也	東京 濱中治三郎殿	一金壹圓貳拾錢也	同 武藤 照憲殿			
一金五圓也	同 尾崎 藤吉殿	一金五拾錢也	同 平出 武男殿			
一金五圓也	同 尾崎 一郎殿	一金貳圓五拾錢也	東京 岩崎 清八殿			

右難有入帳仕候也

財團法人統一團會計

本多日生上人著書 特價提供

一聖語錄	改版	全	送特料共	金壹圓八拾錢
一日蓮主義本領		全	送特料共	金貳圓拾錢
一法華經要義	賜天覽	全		金貳圓五拾錢
一日蓮主義心髓		全		金壹圓五拾錢
一日蓮主義精要		全		金貳圓九拾錢
一佛教の本質と其價值		全		金貳拾五錢
一法華經要品		全		金五拾錢
一日生上人レコード		全		金參圓廿五錢

磯部滿事謹輯

一本多日生上人

一動作作法

以上施本用として多數御引取には特別便宜御相談申上候

一月「教」誌

申込所

東京市小石川區音羽町六ノ一七

「教」

發行所 振替東京一〇九四〇番

東京市小石川區音羽町六ノ一七

財團法人統一出版部

振替東京九四二〇番

統一定價
一册 全貳拾錢 送特料共
一ヶ年 全壹圓貳拾錢 送特料共

注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲御購居ノ場合ハ必ず新書共直ニ御
通知ノ事

昭和九年十二月廿四日印刷納本
昭和十年一月一日發行

(第四百七十八號)

不許複製

東京市小石川區音羽町六ノ一七
磯部 滿 事
發行所
印刷所 都 印 刷 所
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所 鈴 木 日 雄
電話高輪六〇二四番

發行所 財團法人統一團
東京市小石川區音羽町六丁目一七
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

次 目

聖訓摘要	……	日 上
新年の挨拶	……	佐 上
軍縮に對する吾人の覺悟	……	岩 井
皇道と法華經	……	井 上
年頭に方りて法國冥合を念す	……	野 上
天理教の問答對詰の顛末記	……	藤 田
法華經講話（第十四講）	……	生 田
記 事	……	上 辰
○各地教信	……	上 辰
○寄附團費誌料領收	……	人 卯

號月二年一十四第



統

一

法財
八團
統

一團發行